時代蒔繪
世話摸様

# いろは藏三組盃

時代蒔繪世話摸樣

# いろは藏三組盃

座本　竹本染太夫

地年始嘉儀の御報い。勅使鎌倉に下向有ば。四座に仰て饗應の。御能半に俄の騷動。打亂たる笛太鼓。こける鼓の大小名。烈を崩して馳違ふ。素袍の音も騷がしく。地桐の間の襖押開き。飯田の嫡子同苗左近まだ前髪の若緣。はぶり振袖大廣間。悠々として歩み出。詞ヤア〳〵諸侯の旁。何故詰所を混雜めさる。かゝる非常の事有ば。猶嚴重に守るべきを。立騷がるゝは麁忽千萬。各々席を相紛されよ。しづまり召れと大音上。押ゆる詞嚴然と。年は十五に形振も。太守の二葉かんばしき。地皆々實もと鎮まれど。事の子細は白洲より。追々かけ來る使番。詞只今の騷動は松の間の廊下にて。伯州鹽冶判官殿師直殿を双傷に及ばれしを。お次に控へし加古川本藏。走りかゝつて判官殿をむづと抱とめ候故。右往左往にかけ隔たる。騷ぎにお能も止り候。意趣の次第は追々に。地跡より注進有べしと。申捨てぞフシ引かへす。評議の席へ立出る。執權飯田多門頭。跡に續いて金澤彈正。衣紋正しく立並び。詞扨々思はざる不時の騷動。判官高定何等の意趣有にもせよ。此度の役がらと申殊に營中。場所時節も辨へざる短慮の行跡。兎角武士は堪忍を能守り。遁るべきを遁るゝが大勇。命を輕んじ强きにほこるは血氣の勇。何と左樣ではござらぬかと。地尋に諾する多門の頭。詞夫臣下たる者は。我命も我儘ならざるに。身を捨て輕々しき所業は第一不忠。併ながら事に望んで屈せざるも武士の魂。ハテ是非もなき次第やと。地麁忽を悔み兩人は樣々評議なす所へ。茶道が肩に師直は。かゝる事にも挫ぬ奸侯。頻打振て挨拶も並居る中を打通る。多門頭聲をかけ。詞先待れよ師直殿。勅使お成に不淨を清むる此營中。血汐の穢憚りなり。地控へ召れと呼留れば金澤ずんど向ふに立。詞有職故實の家がらに似合申さぬ師直

殿。但しは血迷ひ召れたか。白洲へ下つて通られよ。早く〳〵と制せられ。地無念ながらも師直は。理の當然に力なく。フシすご〳〵白洲へ折柄に。地御上意ぞと呼はつて。お傍小姓罷出。詞鹽冶判官高定。私の意趣を以て。大切の場所を騒がせしは。其科至つて輕からずと即刻民谷殿へ御預け。急々罪を咎むべきとの御事。又師直義は。場所をつつしみ刀に手をもかけざりしは。神妙の行跡なりと御感有。即典藥を添らるゝ間。館へ歸り心儘に保養有べしとの御事なりと。地聞よりぐつとのし上る。我慢の鼻も高々と。上座へずつと立戻り。詞ナント聞召つたか各。我君さへ斯大切に思し召拙者。イヤ又師直なくば天下はくらやみさ。ソノ我威勢に張合んと。大祿で押かけても役にや立ぬ。なぜと言つしやい〳〵。貴樣達が取は位牌知行とゆつて。死人の跡取だて。コレ〳〵先祖の恩を惡く思はつしやんなや。罰が當る〳〵。慮外ながら此師直は。自分の器量で取る知行。何と叶ふか。叶ひますまひ。ハヽヽヽヽ。ヤナニ斯なさい。ちとあやかる爲じや程に。身が影を汲立の水に寫して。戴いたが能わいの　地ハヽヽヽヽと　フシ嘲哢す。地多門の頭につこと笑ひ。詞いか樣當時出頭の師直殿程有て。遁成向ふ疵。併心をもみ召るゝと跡の痛み。早く歸つて保養召れと。地言かへされて頬眞赤茶道が持し血刀引取。詞鹽冶づれがなまくらで。ちよつか廻したかすり疵。何是式に痛所か。恥さらしの此刀。鐘鑄の奉加に遣はせよと。地短刀庭に投付る。法外憎しと彈正は。落たる烏帽子拾ひ上。詞扨こそ〳〵。判官程の手の内にわづかのかすり手心得ぬと。思ふに違はぬ此烏帽子。鐵の金輪を入られしは。ハテ扨きつい御用心。アヽ鐵輪なくんば浮雲物。此烏帽子こそ命の親。今より家の重寶と大切にしめされたがよふござる。ハヽヽヽ。地嘲る詞も耳に風ふくれかへつてずんと立。詞乘物參れ。家來共。地はつと答へて藥師寺が。引添ひた〳〵平付の乘物の戸も八文字におつぴらかせて　フシ布袋乘。詞イヤ何御兩人。鹽冶がけふの大罪は生酢な事では納らぬ。仕置の差配惡く召れば貴樣達の身にも報ふ。そふ心得て居られよと。地意地の詞を奥庭より。舁出す網代の乘物に。付添翅大鷲文吾霑れ。フシ白洲へ立出る。地藥師寺見るよりゑせ笑ひ。詞ハヽ叶はぬ腕立。命の鹽冶今日

限り。地ハテ能ざまと雑言過言。大鷲ぐつとせき上て。詞ヤア藥師寺のぬつぺりめ。諂ひぬかす其舌の根。切下てくれんずと。地きつば廻せば。詞ハ、、、。うぬ迄がうろり眼。目に佛もないざまで見事身共を切さげるか。ヲ、ずだずだに切刻む。イヤ推參なと地兩人が既に斯よと見ければ。地コリヤ〳〵兩人。いらざる互の詞論。又も無禮を重るかと。地兩士に急度制せられ。双方睨で鎭まれば。地奥は勅使の御座遷。不淨清むる管絃の音。こなたは互に修羅道の。巷にかゝる網乘物。思へば無念と大鷲が。かけ寄向ふを藥師寺が。隔つる二行の乘物は。善と惡との。足利御所。引別れてぞ　三重歸りける。比は二月の春霞。引も契らぬ旅人の。おふさきるさに道急ぐ。駒にも鞭をフシ宇津の山。登り下りに越わぶる。地五丁七丁飛ごとく足取輕き寺岡が。本國よりの早使鎌倉さして行野路の。春風誘ふはだせ馬。打立々々かけくるは。殿の變事を本國へしらせの早打大鷲文吾。是はと驚き平右衞門。聲かけん間も荒馬の。四足に蹴立る砂煙雲や霞とフシかけ通る。地跡打眺平右衞門。ハテ心得ぬ。詞よく〳〵過急の事なればこそ。上下慌斗目も其儘の早打。ア、氣遣はしや地胸がをどると。フシ猶打見やる後より。地道をよぢれる千鳥足。砂道戻る遲飛脚。思はずどつさり行當りころり轉たる十團子砂にまぶれて地起上り。詞ヤこいつが〳〵。見れば儕も飛脚そふなが。街道につゝぱり返り。何で身共を轉ばした。びやくらい地忍ならなひと。地むしやぶり付をもぎ放し。投るはずみに落たる狀箱。驚きかけ寄飛脚が膚腹。眞の當身に。フシのめらせ置。狀箱解て上書眺め。詞斧九太夫殿へ高の師直。地ハテ心得ぬと押披き。詞何々貴殿存のごとく兼て意趣有る驕冶判官。此度の役目を幸手段を以て仕損じさせしを無念に思ひ。我等に双向ひ候故。切腹仰付られ候。ヤア。御主人は御切腹か。地ハツはつと計に腰も拔。詞扨は師直が舌先にかゝり。やみ〳〵とお果なされしな。儕師直主人の敵。腕限りに切入てと。地行んとせしが。詞イヤ〳〵イヤ。大星樣の御心底もいかゞなれば。一刻も早く國元へと。地かけ出してはふり返り。思へば無念と立戻り西よ東とかけくるひ〳〵。打付し狀又取上。詞去によつて家來のやつ原。我を覘はんは必定。城受取を幸に皆殺しに致すべき

手あてに候。貴殿我等に心ざしを運れ候故。密に申送り候。フン。扨は九太夫め。兼々一味ひろいだな。アノ人外めが。よし〳〵此狀こそよき土産と。地取納める間やう〳〵と。性根付たる以前の飛脚むつくと起て後より。欺し討に切付るを。ひらりと飛退身構し。詞儕も敵の片われと。地言より早く拜討。體は二ツ一筋の。忠義一途に身を固め。飛がごとくに　三巴かけり行

## 第二

地世の憂伏見街道に。扶疎の軒は寺岡がすむ月内へもり次第雨か涙かしめ〳〵と。結目もしまる竹簀の子。かき集めたる思ひ草。フシ結ぶ夢にも。地現にも。夫の歸り松の風門打荻に起されて。地折燒柴の煙さへ。フシ絶間がちなる詫しさよ。地憂が中にも子を思ふ。親の心はうば玉の。夜の物さへ荒筵の屏風押退。詞コレはしたりこんなわんぱくな寢樣が有か。地風引なよと解分の。襤褸一重を引着て。ホンニ可愛や。フシいぢらしや。詞辨へなき心にさへ。今の暮しが苦になるか。めつきり細つた事わいの。地何に付ても思はるゝ。お主樣の御恩程。世に有難き物なしと。冥加忘れぬ忝涙寢顏へほろりかゝり子の。平吉は目を覺し。詞かゝ樣わしも最起やうか。ヲヽかしこひ〳〵朝起仕や。貧にはきのふ爺樣の土産の歌賃ぶうして有と。地取出す折敷ぶち放れ。角行燈の燈火もしめす東雲鳥よりも早き足輕平右衛門。背にしつかと大星を助けて歸る我家の門。片手に押明女房共〳〵。詞ヲヽこちの人戻つてかと。地何心なく出向ふて。詞ヤアそれとな樣の顏も體も泥まぶれ。そふして誰やら負て迄。戻らしやつたは心得ぬと。地不審立寄見て惚り。詞コレハマア〳〵思ひがけない由良之助樣。よふこそ御入下されしと。地敬ひ頭下ければ。詞コリヤ聲が高い。晝夜の御酒に勞れてござる。ソレ必お目覺させますなと。地くぼみ壘へ和かに。我身を添てフシ沖の石。地かはく間もなき酒びての。羽織の裏のちらし書。詞更て廓の粧ひ見れば。宵の灯火打背き寢の。是見さんせ。美しう書て

有に。あつたら事は酒だらけ。定めし夕部も祇園町とやらに。ござらしやつたで有ふな。サレバ〳〵。例の彼一力にござ有べいと。何があの邊を行つ戻つ。すれ違ふ遊女共が噂を聞ば。由良様は今宵歌開きとやらに鐘木町へお出といふ。是は扨と取て返し。いきせき行つく大門口。喧嘩〳〵と立騒ぐ。相人を聞ば由良之助様南無三寶と有無を論ぜず。群集中を張退蹴倒し。五人三人ぶち投たれば。蜘の子を散す様に逃ちる跡に。正體なく倒れてござるを。漸々と背に追來る奴原に。道をかはして。モどふやら斯やらお供をしたと。地咄す人より聞ひあいさ。詞夫はまあ〳〵あぶない事。地あなたに怪我はなかつたかと。見やる一間を出る平吉。詞コレとゝ様。奥の叔父様がの。中居共〳〵。水慘が喰たいと無理いふてじやぞへ。何水慘をせいとお好か。ホヲナイ〳〵ない〳〵〳〵用意がない。地時の用には洋たれの。詞坊主よ。とゝが褌かすは。裸になれと着物を脱しかゝれば。地女房は笑止障子の破れを覗き。詞コレ待んせ。こちの人今のは夢じや現々。ヤ扨は。御本性ではなかつたか。ヤレ嬉しやの。すつての事に坊主が袷。地質入木の身がはりに。フシやらふとしたと吹出し。地笑ふ門へも福は來で。鬼と名を得し外料治安。世界の人を腰さげの金物光らす目玉の出兵衛。フシ引連立てのさばり入。地雪踏の儘に揚り口蹴ちらす茶碗煙草盆。微塵こはいの内の體。來かゝり覗く天川屋。フシ様子有んと立忍ぶ。地夫婦はおず〳〵しよげるに付入。詞ヤイ平右衛門とは儕じやな。取込おつた刀の持主。目玉の出兵衛といふ男よふ見て置。元アノ刀は鹽谷が家の重代。今度師直とやらいざこざ故に上り物。拂ひに出たを買取。何でも鹽冶浪人に見せたらば。主人の刀とほしがるは定。スリヤ金設に成事とノウ治安。ヲ、そふぢや其跡はおれが言ふと。地胸ぐら取て引廻し。詞コリヤすりよ。儕は由良之助へ出入する事しつた故。どふぞ見せて百兩位に賣てくれと。刀を直に預けたぞよ。夫から毎日催促すれど酢の蒟蒻のと釣付おる。大方刀は賣てしまい。金は宙でくすねたな。アノ爰な横着者めが。コレ〳〵〳〵必麁相おつしやるな。左様の非道を構へて今日の天理が濟ふか。成程ケ様に延引成まするも。有やうはあの刀私めが求めたさ。ヤア〳〵〳〵大きな事をまき出

したが。ほうげたは裂やせぬか。サア定ならば今金せう。イヤ只今と申てはないか。なくば刀せふ。但しは首にせうか。三ツに一ツの埒明い。サア／／どうじやとたくしかけ　地せり詰られて。詞イカニモ／／金子調へ差上ん。ガ迚もの事に爰四五日。ヤアならぬわい。儕が金を拵へる間待根が有ばな。弘法と張合て。みろくの出世待わいやい。あたけたいなと髢髪。　地取て引寄捻付る。奇怪なりと思へ共。じつとこたゆる夫の體。見るに悲しさ女房分入。詞マアマア待て下さりませ。　地成程金は調ひまする。ハテ叶はぬ時は私が身を。君傾城に賣られてなりと。詞コレ／／おかたの鏡を見やいの／／。　地犧に備へた迚今時の大蛇は呑込そむなひ頬付。いやな事ぬかすなと。　地二人の牛頭馬頭寺岡をフシ中に挾んで責打擲。　地とむるに甲斐なき女業。何と詮方納戸より。兩手に脇差小刀引ずり廻り出る平吉。夫はと寺岡立寄を。詞どこへ／／動きあがるな。大盗人め。扨々子供は正直な。ドレ／／ちいさよ。小さ刀伯父に　地おこせと引たくれば。詞ヲ、夫取おつてもまだ爰に。とゝ様の脇指が有。是であいつらを切ていのと。　地わつと泣出す我子を引寄。詞ヲ、切てしまへとは侍の性根が有てういやつだでかいた／／。出かしたな。　地子心にも此親が。恥づらかくをまじ／／と。見ておつては無念に有ふ。口惜からふ。可愛や／／／／と。抱しめたる慰愛の不覺の。フシ涙せきあへず。詞コリヤ面白いわい出兵衛が一番切れてやるは。ヲ、おれが縫ふてやるは。治安强みにぐつといけ。サア切れ切れ／／切おれと。　地尻引まくり鼻の先。摺付押付傍若無人力味返つて平吉が。すらりと拔ば平右衛門。袖にて覆ひ指俯き。面目なげに見へにける。詞ム、へ、、ハ、、、、。こりや胞衣ではない人じやぞよ／／。コリヤ／／人間様じやぞよ。竹篦では行にくい。へ、、、、馬鹿盡すなと蹴飛して。　地引提出る刀に取付。詞コレ／／申。此刀が手に入ませぬと。死でも叶はず。生ては猶々濟ぬ身分。どうぞ聞分お賣なされて下されと。　地妻も俱々取縋り涙と俱にかきくどく。詞ヱ、叶はぬ事をどびつこい。きり／／爰放しおらふ。イヤ／／／／何ぼうでも放さぬ／／。　地ハテ面倒なと捻合引合。詞放せイヤ／／／／放さぬ。放せ。イヤ／／／／放さぬ。放せ。放さぬ。放しあがれと フシせり合たり。

詞ドレ其刀買ましよと。地言つゝ這入る天川や義平と見るより赤面の。寺岡突退惡者共。詞ハテあぢな買人が出たな。ほしくば賣ふがてつきり百兩。わり樣買かよ。イヽヤ手前が買はアノ竹光。何と賣て下さらぬかと。地變な望に平右衞門。詞アノ此魂がお望とはな。サレバイノ。世にない干將鏌鋣でも品に寄たら求められまいものでもない。ガ又譬千兩萬兩の。金を積でも買れぬは。忠の地金に義の燒刄。あつぱれ見事。きたい地上た。竹光といふ名作のこなたの魂。買たうござる。詞サ不肖ながらお賣なされて下されと。地投出す包の小判より光り。フシかゞやく男なり。地夢かと計悅ぶ夫婦。コレハ〳〵見るかげもない拙者めに。大まいの金子御取替下さるゝ御惠み。ヱヽ忝し〳〵と押戴き〳〵。詞サアお身達金子渡さふ刀を持ちやれと。地言れて底氣味惡者共。おづ〳〵立寄めつかうを。碎けて退と打たる包。アイタシ是は御きんとふ。詞受取跡より嗅樣さらばと逃出すを。地飛かゝつて引摑み兩方一度に投返し。頭轉胴骨打付られ。ほう〳〵表へ逃フシ出しが。點頭合て藪垣へ。鼻息もせず忍び居る。地跡に三人囁き合。妻は納戸へ寺岡は。明る障子の神々にも。心を籠る小さ刀。差置フシ其身は押さがり。詞先程よりの一部始終。定めしお聞下されん。大切成御刀私風情が。手にふるゝは勿體なし。いざお受取下されふ。申し〳〵といふ聲に。漸々寢返る仲欠氣。詞アヽざは〳〵と何でえすの。ハ其御刀は殿樣の。血汐をあやし給ひたる。御家の重代コレ〳〵。ハテやくたいもない不吉〳〵。コレ此刀故にこそ。其樣も我等も此難義。まだ仕たらひで祈るのか。地ヤレいまはしや穢れると。あいそ投出し又ころり。たはいやくたいフシ無りける。地勿體なやと平右衞門。及上て拔放し。血汐にくろむ鋒を。打守る目も血走る涙。思ひ出すも口惜や。詞去二月下旬。鎌倉の殿中において。我君師直を双傷に及び給ふ。場所時節を辨へずと御憎しみ。既に御切腹と事極る。御家臣多き其中に。羨しきは大鷲殿。御暇乞相叶ひ。其儘白洲へ出らるれば。早御最期の其の用意。庭上に疊を敷。三方に中卷仕たる九寸五分。御前に直しければ。亡君檢使に向ひ給ひ。我今日師直に切付たる刀をたべよ。武士の腹切樣を見せんと。コレ此刀を乞請給ひしは。後々に至つて鹽冶こ

そ。鈍き刀を指たりと。言れん事の殘念と。地思ひ給ひし故ならんと。思へばいとゞ殿様の。御心根がおいとしぼひ。詞夫より肩衣刎退給ひ。刀追取弓手のそは腹。がばと突立引廻し。苦しき御息ほつとつき。ヤレ大驚よ。我斯成は覺悟のまへ返す〳〵も師直を。討もらしたる殘念さは。億萬劫を經迚も。忘れがたき我鬱憤。晴させくれよと大星に。地傳へよかしと計にて終にはかなく成給ふと。いふ跡聲も泣倒れ。身を揉五臓ずだ〳〵に裂る思ひを思ひやる。義平も俱に無念の涙。フシ拳を握り居たりける。地平右衛門は大星が。枕元ににじり寄。詞コレ其時の御遺言。よもや忘れはなされまいに。毎夜々々の御遊興。何たる事だと恨んでも見たり。イヤ〳〵深い御所存ならん。大事の御身と思ふ故。そも山科へ御引越なされてより今日迄。餘所ながらの御供し。爰の門には立。あそこの軒にはつゝくりと。御歸りを見屆ねば。休だ事はござりませぬわいのふ。地ケ程に存る拙者が胸中。不便な事だと思召し。少成共御本心。お聞しなされ下さりませ。詞輕いやつ故口ばしらふかとの御疑ひならば。生ておつて何にせん。御手にかかつてくたばりませう。コレ〳〵申し〳〵。去迚はお心强い。地餘りむごい胴欲なと。墨鄰いて泣わめけど。只ぐう〳〵と鼾より。外に諸はせざりける。地表に忍びし二人はゑつぼ。コレ〳〵出兵衛。大星が性根はしれた。左平太様迄注進せよ。身共は猶もためし見て。跡より行ぞ早急げと。追立やつて。藪垣へ。フシ又も窺ひ立忍べば。地寢入伏たる由良之助。むつくと起て藪垣へ。打込手裏劍治安が急所。フシきやつと計に死だりける。地是はと驚く兩人を。押鎭めて由良之助。詞ホヽヲ彼等こそ我が所存を探らんと。敵より入る廻し者。證據は則夫成刀。亡君の御所持とは。しら〳〵しき似せ物。いで其仔細語らんと。地帶する指添上座に直し。遙に下つて平伏し。地是こそ鹽治の御家に。世世傳はりし義貞の刀。御切腹の後。御本家壹岐殿の手に入しを。竊に我に給ひしは。亡君最期の魂を。こめられし劍なれば。是を以て師直が首。かき切て御石碑に。手向よかしとの御心。ハヽヽヽ有難き御差圖と。地肌身放さぬ御賜。さすれば外に有ん様なし。詞去りながら似せにもせよ。是ぞ主君の魂と。思ひ込て求めしは。遠大功平右衛門。

今こそ血判赦したりと。地連署の一卷渡さるれば。餘りの事の嬉しさに。物をも得言ず。寺岡はをどり上り飛上り。三拜九拜なす計。詞ヲ、嘸御本望出かされた〳〵。義平も大慶仕る。手柄〳〵〳〵と。地あふぎ立ればはら〳〵涙。詞是と申もあなたのおかげ。忝い義でごはりますと。地腕先引てしつかと血判。詞ノウ平右衛門殿。願叶ふて嘸悦び。由良之助様。ヱ、有がたやの聲諸共。障子にばつと立血煙。あはてふためき天河屋。かけ寄見ればむざんやな。咽吭ひし切る剃刀の。双よりも薄き夫婦の縁。今ぞ絶なん玉の緒も。我子の紙にからまれて。引取兼る息ヒイ〳〵。聞狂しさは骨々に。こたへこたゆる平右衛門。詞ヤイ女房。願叶はゞ足手まとひ。兼て覺悟を極めよと。言付置たを能守り。ヲ、よう死をる出かしおつた。モウ何もいふな。取亂すな。早くくたばれ地〳〵と。言口迄もつゝかくる。涙呑込呑込で。詞ヲ、息引取ぬは躬が事か。氣づかひしをるな。只今やると。地取て引寄振上る。刀を押ゆる天河屋。大星暫しと聲をかけ。ヤレ早まるな平右衛門。詞妻を殺し子を害し恩愛輪廻を斷切て。潔く亡君の仇を討んず汝が魂。ホ、ヲ感じたり逞しや。健氣の夫に連添ば。倶に勇々しき忠義心。女に稀の志。惜まぬ習ひの武士さへ最期の際はケ程迄。詞健氣には有間敷に。ヤレ出かしたり地去ながら。せめて躬は助置。母が手向の香花を。取せよかしと仁心の。詞は直に知識の引導。今ぞ落入る安堵の往生。安養世界へ我々も。導引よやと手を合せ。南無阿彌陀佛と同音に。唱ふる聲もかき曇り。袖にしぶきの雨やさめ。涙はらふて義平は立寄。詞イヤ何寺岡殿。由良之助様御親子始め。徒黨に加はる旁は。御本望だに遂られなば一人も此世に殘らぬ御所存。貴殿迚も嘸有らん。さすれば血脉を後の世に。殘すも一ツは先祖へ孝。幸ひ〳〵。力彌様の御舍弟は。廣島源五左衛門様に御座有れば。此子を直にお傳役。御奉公をさせませんが。先夫迄は此義平が。急度預り養育せん。地かならず氣遣ひ致されなと。フシ約束違ひ亡跡に。義士の血脉は今の世迄。殘りし秋の夕日影。うつろふ空は紫の雲かと見へし藤の森跡に見捨る亡骸に。縋りて父と慕ふ子に。孝有貞有武士の妻。忠有二人信有町人。末世の鏡天下一千五百石。國家の寶山科へ。打連てこそ　三真急ぎ行く。

# 第三

地蔵の大事は三ツ地に有り。裏表有を士といふ。兵法一百八十手逃るを以て第一とす。酒色財三を貴ぶと。譯なし事を書散す。反古障子の樂書は。大星由良之助良金が。身の置所山科より。木や町邊の借座敷。子息力彌は小蔵に武藝馬藝はいつしかに。棚にあげはま碁將碁に。送る月日の光りさへ。恥と人目に長月の。フシ秋の日早く傾けり。地夫の爲に妻櫛も。遺神崎彌五郎に連添心弓張の。おかるは爰に宮仕へ。詞申し力彌樣。一昨日お國よりお登なされし母御樣祖母樣。一ツ座敷にござなされどしみ〴〵とのお咄しもなし。畫は碁將碁蔵の稽古。お二人のお心にもいかがと思召しも氣の毒。私迚も女ながら。神崎彌五郎が女房。地夫に連添ふ心は一ツ。どふぞ敵師直をと。いふを打消し由良之助。詞ハテ扨女の小指出た。侍の言ふ事閑はづゝて。敵などゝは何の事。コリヤ力彌も能心得よ。借座敷の徒然に。書汚して樂書。轉業ながらよふ味へば。諸藝萬事の心がけ。お身が打小蔵も。手の廻る任せに樣々の曲は誰も打。何事もない三ツ地がいつち打にくい。碁に切手なし將碁に詰なし。詰ふと指ば下手の將碁。詰られまいと立廻るが大事の口傳。裏表なきと士とは大きな取違へ。啞をよふつくのが誠の士。兵法は逃るが奥の手。ぬらりくらりで長生するのが人の肝心。只世の中は酒と色と金銀と。此三ツより大切な物はない。敵討などゝいふ事。マア當世の捨り物。此心入で一番打ふか。地碁盤爰へと黒白の。地心分たぬ大星に。おかるが胸の目算違ひ。フシ詞なげ首立て行。詞サア幾って五ツでか。夫でも成まい。今一ツ置て六ツの花。謠山寺のや。春の夕暮來て見れば。入相の鐘荻の聲。裏の障子を押明て。由良之助の奥方つか〳〵と立出。詞謠の聲碁石の音。隣座敷へ響きます。私は夫婦の中。おいとしやお袋樣。遙々お供申せしも。地そもじ樣の腰が拔。お主の敵は打忘れ盤上亂舞の遊び事。弓矢の道は捨りしと一門中の腹立。詞此異見の爲計。國元の老母女房が。頃日登つた早々から。地親子碁盤であほうげな山寺所じや

有るまい事。詞過分の知行を賜り。鹽冶判官の執權と敬はれ。三千騎五千騎の諸士の上に立。國中を靡しは。殿様の御恩ならざるや。地其敵を生て置。御命日の精進も。御回向も寺參りも。何しに佛が受給はん。御恩は何で報ぜんとや。詞ヤイ力彌め。躰め。父こそ腰が拔ふずれ。母が腹を借たぞよ。地なぜ父御ぜに異見はせぬ。家に爭ふ子なければ家治らずといふ事を。常に云たが忘れたか。詞儕が二歳の秋の末。有がたや殿様の。お膝の上に抱上られ。親に劣らぬ人相有成人して忠功なせと。力彌とは殿様の。お着せなされし。フシ烏帽子ぞや。地其時に勿體なや。稚い者の習ひ迚。殿のお膝を濡せしを。詞却て殿には機嫌能。出かした／＼。主の膝を憚らぬ。其心では百萬騎の。敵を敵共思ふまいと御感の詞を常々に。言聞したを忘れはせまい。人でなしの爺親は忘れても。詞此母は寢ても起ても主君の御恩。暫間も忘れはせぬ。地庭にかい飼ふ犬迄も主の仇には嚙付ぞや。佩た刀は假粧伊達か。左程敵がこはいかいつ迄命が生たいぞ。臆病者比興者。何の因果に腰拔を。子に持つたぞと聲を上げ。前後不覺に泣居たる。恨の程ぞ道理なる。地力彌は打俯きフシ返答せず。地由良之助色を變へ。詞ヤア口上ばるな女め。主の敵を得討いで。恥をかいても身共が恥。酒宴遊興長生して。樂しみも身が樂しみ。人を雇ふ事でない。譽られて死ふより。譏られて生たが德。一門も緣者もをか目八目。傍からは言よい物。力彌に向つて惡口。我子には言れふが。夫には言れまい。サア言れふば言ふて見よと。地聲もあらく成所へ。母は奥より走り出。詞ヲ、夫には言にくゝ。我子にはいひよいな。そんなら其方は妾が子。そちに言は此母。去ながら口では言はぬ。犬同然の畜生は。礫に思ひ知せんと。地碁笥なる石を引掴みかい掴み。目鼻も分ずばらり／＼と投付け／＼。さんぐ／＼に投掛けてわつと泣出し。詞なふ奥。こなたも元は他人なり。アノ様な子を持て。そなたの心が恥しい。何にも言やるな言ふまいぞ。地サア此方へと手を引て。涙ながらに立て入る。遺は武士の嫁姑例なふこそフシ聞へけれ。地大鷲文吾竹森喜多八。敵の様子を聞繕ひ。毎日爰に木や町筋。フシ案内に及ばず入來れば。地爰へ／＼と親子はひそ／＼。兼て心は聞の戸障子差寄て。詞扨御發足の日限は。サレ

バ〳〵。先達て鎌倉へ遣はせし。神崎矢間なんどか方より。毎日の催促。我も心は早れども。今少し心に叶はぬ事有て發足延引。ハア其義も御尤に存れ共。隱すとはすれ共多人數の事なれば。期は延る程もれ聞へ。用心に用心を重ねさしては。一向に志もむだにならん。ノウ喜多八。左樣〳〵。イヤ最う此上は一時も早いが勝。サアお心を決せられ。地下さるべしと混に。いへど大星默然と。返事思案に暮近く。西日さし入る赤前垂。祇園の仲居詰袖の。フシ藝子交りに。大星が向を覗いてびらしやらと。戸口からちよいと招けば由良之助。詞早い〳〵。マア〳〵〳〵待て待て〳〵と。地いふ程いらつ大鶯竹森。詞イヤサいつ迄待のでござる。もふ〳〵日々に師直が。威勢の募る咄しを聞てどふも虫が堪忍致さぬ。サヽヽ尤々。尤ながらそこの事。由良之助が了簡は。百發百中の謀を廻らし。時を待て打立所存。譬て言はゞ十の梯子を。まだ七ツ過暮六ツから。追付行く〳〵。ナニ今宵暮六ツに御出達とや。其お詞を待兼ました。サヽ然らばイザ御用意。ハテ扨々々。六は陰數軍に不吉。まだ今夜など行れぬ〳〵。マア一月も待たがよいと。地いへば門には興さまし。詞さつてもきついきしまし樣。コリヤこつちから用意しておだてずばお出まい。地いつそ大勢連立て後に。斯々諸き合。鼻歌交り塗下駄の。音も色めき立歸る。地跡には二人眉に皺。心を碎く表の方。西國武士の供廻り乘物しと〳〵音すれば。人こそ來れ何れも暫し。あちらの間で內談有。ハツト三人打連て次の間へ立フシ門に立。地乘物付の若黨が。小腰かがめて。詞頼みませふ。大星由良之助樣御旅宿と見受。壹岐の國守より使者として。廣島源五左衞門罷越。御對面下さるべしと言入るれば。ムヽハテ珍らしい音信。いかにも由良之助在宿致す。壹岐のお使者源五左衞門殿。お通りなされと申しやれ。地アツト答への戸を押明。立出る源五左衞門。十か九ツちよつぽりの。剃下頭も愛らしき。道大家の家老職。跡に引添ひ若黨佐五兵衞。乘物下部は旅宿へと。差圖にフシ皆々立て行。互に一禮三ツ指にて。詞久々貴意得ませず。由良之助殿にも御堅勝に御入なされ。珍重に存じまするとと。地こましやくれたる武家挨拶。由良之助打微笑。詞ヲヽ壹岐の御家老御成人で珍重。ナニ佐五兵衞も堅固で目出

度。元來主人鹽冶樣と。石堂樣とは親しい御一家。其御家老の先源五左衞門殿。急病にて跡目なき故。身が躰の此吉次郎。所望によつて養子に遣はし。幼少ながら二代の源五左衞門に成され。二千石の知行頂戴。此親や兄の力彌には。生れ勝つた身の果報。嘸お手前達の世話で有ふ。ヤ是は內證。お使者の趣仰聞られよと。地有ければ。詞主人申越まするは。其方殿主人鹽冶殿不慮の生害。其時の腹切刀。石堂達て乞うけ。先達てより其方の手に渡り有筈。やはり其元に有かないか。此御返答承はつて歸れとの御事と。地辯舌さつぱり二葉より。フシ誠に親の子なりけり。地父も暫く思案の體。詞ム、いかにも其九寸五分。一旦身が手に入つたれど。マア言はゞ不吉な刀。捨られもせず難義致した。夫を今更詮議して。石堂樣には何になさるゝ。イヤ〳〵申。近比憚ながら佐五兵衞が存まするは。此御口上は深いお心の有そふな事。其腹切刀は。石堂樣が役人中へ達て所望遊ばされ。由良之助樣へ遣はされた心は。其刀を以て主人の仇を。コレ〳〵佐五兵衞。ム、若夫なれば石堂樣のきつい無分別。主人鹽冶樣の切腹は。我てになされた身の誤り。畢竟御自身の短氣が敵。其外に敵はない。何の益に立ぬ九寸五分。此方に置ても邪魔に成るから。古道具屋呼でとふに賣拂ふてしまふたはい。ヱ、さすれば敵をお討なさるゝお心は。ござりませぬか。ハア是非に及ばぬ。且那お覺悟遊ばしませ。ヲ、覺悟は極めて居るはいやい。ヲ、よふ仰しやつたのふ。申由良之助樣。眞實其お心なれば。此お子は腹なされにやなりませぬ。只さへ人の惡說。由良殿は腰が拔たと。取沙汰が殿のお耳へ入。九寸五分の返答とは。敵を討氣が有るか無いか。若なければ。臆病武士の血を分た躰。此方の家老の家繼すは穢れ。再び歸るなとの御詰。お少ふても侍。痛はしながら御切腹さしませねば。叶はぬ手詰。返答過急に聞切て。早速國へ知せよと。相役が旅宿迄來て居らるゝ。返事は今夜の夜半迄。どふぞ此お子の御無事で國へ。お歸りなさるゝ能御了簡を。地お聞しなされて下さりませ。詞おとゝしから私を。べいよ〳〵とお廻しなさるゝ。私しや此お子がおいとしぼうてなりませぬ。申し〳〵大星樣。御思案をお仕替なされて下さりませと。地いふ聲も咽詰らす。フシ正直淚。地一間に立聞

お石が思ひ。我子の健氣を見るに付。出るに出られず夫の心。神佛が入替り。忠臣に成てたべかしと。願ふつらさは由良の戸に。心ぐれつく丸太船。いなせの返事待兼て參らせ揃ふ迎ひの茶屋駕籠仲居が先へ且那樣遲ひ。ちやつとお出い。フシ媚く聲。詞ヲヽそふ有ふと思ふて居た。直に此儘。地ドレ行ふと。聞て惋り申し〳〵。詞只今の御返事を。ハテ返事は最前して置た。モウ用はないと振切て。地竹輿にひらりと移り氣な。客をはやして祇園町。またげじやハイ〳〵。吹送る風に取れて跡白浪。ハツト吐息は諸共に。お石は堪兼轉び出。我子に取付。むせび泣。大鷲竹森走り出。詞イヤもふあつけに入た穿鑿。心へぬと存るから。御内室お袋を。態々國へ呼に遣はし。異見の爲と思ひの外結句場晴たアノ益體。彌ク腰が拔切たな。サイナ。お前方の手前も連添身て面目ない。母御より女房より。可愛我子の生死さへ。目にかゝらぬは天魔の見入か。地久しぶりで大きふ成てよふ戻つたと言ぬ先に。殺さにやならぬ樣に成。あんな親御の血を分て能こんな子が產れたと。思ふ程猶いぢらしいと。くどき立れば二人の義士。詞モウ所詮はない大星を打放して差違へん。地實に尤と驅出す。詞ノウ待て下さりませと。地泣く〳〵おかるが袂より。詞たつた今此狀が。御寢所に落てござりました。當名のない封じ文。地由良樣の御手なれば何ぞ深い樣子がな。詞マア披いて御らうじませ。ムヽ何方へか遣はさんと。認めて置れし物。地若やと封じめ切ほどき。披けば中は假名交り。詞態と申入ます。兼て契約の通り。彌ク明晩夜討に押寄申すべく候。萬事手筈ぬかりなく賴み入候。いかやうの事有共是非共本望遂申す所存に御座候。尤彼君を大將にて。其外十人計御揚くださるべく候。膳は貳匁五分膳。貳十人前にて宜敷候。大壺持法師藝子。合せて十二三人。わつとなり込大立〳〵。ヱヽ馬鹿らしい狀打付。地互に顏を見合せて。此心底とは知らずして。賴みに思て待暮した。此人の心が碎け。詞もふ本望は遂られぬ。地最早此子の命の切め。詞お石樣。佐五兵衞。地思ひ廻せば廻す程。果報拙や可愛やと抱きしめたる親と子の別れは夜半の鐘限り。短い壽命とゞめても忍び兼たる憂涙一度にわつと臥しづむ。

# 第四

詞リヤン。コウサイ。スムユ。チエイ。ヲツトよし〳〵一ツ上つてお銚子じやぞへ。アイ。地返事取々祇園町。酒の湊に由良之助藝子女郎が取まいて。詞問ましよ〳〵。問はしやれ〳〵。お客に取ては。珍客しゆつ刧邪客飛脚。仲居は〳〵。どうこ番によはるぞ。新造は〳〵。赤松様にかゝつてじや。藝子は〳〵。さい〳〵生ます。悪口言ふまい。赤子は〳〵。ソレ〳〵詰つて赤子は〳〵。ポペン〳〵。ヲゝをかし。ソリヤ何じやいな。ハテコリヤ唐の赤子の泣聲じやはやい。ハゝゝ詰つた〳〵。サゝゝ酒じや〳〵と。地隣座敷何の遠慮もなよ竹に。フシもたれかゝれば。地座頭がむつと。詞コリヤ盲めどふするのじや。イヤ盲の口から盲とは出かした坊主。一杯呑と。地無理に手を取引立れば。詞ヱゝそれが盲じやわい。わいらが座をもつがす座頭じやないぞよ。ホンニ申し減相な。あなたは隣り座敷のお客様が。連てお出た辨慶様でござります。まだ辨慶とぬかす。おりや客じやわい。ハア扨は貴様客僧か。お名は何と。忝くも鎌倉に隱れもない。大名か。イヤサ大名からも公家からも。祝儀はどちらでも受る。岩井勾當といふ座頭。ムゝそんなら。地江戸三界からわせられた。詞お客じやの。そふとは知いて麁相申た。御坊。誤り奉る。コレ〳〵御了簡〳〵。イヤ誤つたで濟かいと。地邪かゝるを。左平太聲かけ。詞コリヤ〳〵坊主もふだまれさ。イヤ此法師は拙者が連。京地不案内の不骨者。無禮は互。最前から見申に。萬事虫を死して堪忍なさるゝ大丈夫。そふなふては大星由良之助殿とは言れぬ。アゝ見事〳〵。なむ三本名顯はれた。實は我等大坂で。いんつう澤の町人じやといふて立て居るじや。所へ浪人じやといふと。きつい茶屋の受が違ふて。ヱゝ時にと。只今お譽のお詞に預つたが扨此堪忍をせねば大望成就がなりにくいの。ムゝさこそ〳〵。シテ〳〵其元の大望とは。サア他言は御無用。拙者が望と申は。きやつを受出して。此祇園町で茶屋を致す了簡じやて。どふじや有ふ〳〵。アノ武士を捨てや。アゝ武士はと

ふから捨て有はいの。侍に倦じ果て。十露盤にかゝつて見たれど。當の商賣は大體の根ではつゞかぬ。當所へはいつて見た所が。凡世界の天上。迚もなら茶屋にならねば本粹にはなられぬと。凝かけたも有禁は。此色めがすゝめ。ノウ床。どこに私がそんな事啞ばつかり。そんなら證人は此朝野。すかん私しやついどそんな事。地存じませぬ　フシとよしばめば。詞あゝいふ所が命の腦。委細は妻にとつくりと。コレ／／／／。地お聞なされ／／／／と餘念なさ。詞ム、茶屋の御亭主。勾當が盃致さふ一ツつげ／／。誠に最前の中直り。押へこなしにこりやマア給ふ。地ソレト投やる盃の。雫は顔に。詞ヲツト直に頂戴涙と仕ると。地拭ふてきよろり何氣なく。詞ハアぬるひかんで虫にさはつた。茶出しで一森入て來い。御免々々と。地肱枕。フシ何所らと知れぬたはいなさ。地佐平太つく／／。コレ由良殿。詞其武士を捨た性根で一腰は伊達に佩のか。ヤ夫程は表の看板。浪人の後入ぬ物と賣喰に致した。所が大小以上十七腰下された。扨咽にも立ぬ物。面目ないが賣殘りがたつた此一腰。爰にないは何所へやつた。ハイ爰にござります。ヱヽおとはめ悪い奴。コリヤ／／／／轉業すなコレ怪我するぞ／／。ナニ眞赤に錆て有ぞへ。サヽヽそれを言ふ事かいやい。イヤ何ぼ双物は錆て有ても。古主鹽冶判官殿の。敵を打氣がなふては叶はぬ。サヽヽ其事じや。浪人の馬鹿者共が義者ばつて。唐の唐人の引事を言出して。晉の豫讓の曳の山の。元家老役の拙者。さながら否とも言れず。せふ事なしの思ひ付。コレ／／是御覽なされ。主人鹽冶判官殿の石塔の下繪。堅空院隨毛理顯大居士。此石碑で諸事の言譯。此石塔を立る迄は。敵討はマア待て／／とつき延す中には。二人へり三人退。段々義士がなふなる。其間に師直殿も年の上。餓でも喰てころりと往かれたら。それ幸ひにヱヽ無念やなと能顔して濟す思案。何と計略も有ば有るものか。サア御坊一ツ參れ。イヽヤ繼めじや。コレ／／此茶碗で改めて一ツ。コレ申。あなたは大分過て有と。地いふ程なをも意地悪ふ。詞イヤ／／呑すおれが酔する。ドレこちへと。地無理に捻付け注ぐ茶碗。詞ホ此酒はゑい端香。何じや端香じや。ヲヽをかし其煖鍋は酒じやない。なむ三茶出しと取違へと。地腹立紛れにこつくりと口

の惡さにフシかけ土瓶。詞法師樣。お前の酌は此朝野。こりや心いき忝いは。御坊少し差合なれど。進上申蛸肴。其吸付のが我等が好物。只一口にこりやかたい。かたい筈じやそりや土瓶の口じやはいな。エヽあほうらしいよい〳〵蛸の代りに此藝子今夜おれが抱て寢るぞ。こりやよかろ。シタが。此座に女子は四人。御坊は一人。片身恨のない樣に。天道任せに揉闇して。長いを取つたが御坊の相方。地サア〳〵來いと引裂紙。詞アヽ是由良殿。こりや只今の。ほんに石碑を破つて退た。地是はしたりの。眞中へ。詞左州樣へ上ましてと　地此御狀をとフシ差出す。詞何じやの〳〵。イヤ是はちと。エヽ色の御文じやな。見せくさらぬは憎いな。アヽ儘にせいと。地緣側にころりとたはひ。仲居共。くじの世話やき御寢なつて。さつぱり公事がさばけたと。フシ皆々奥へ逃て行。佐平太あたりに目をくばり。寢息を窺ひよし〳〵と。足をひそめて座頭が耳。詞コリヤ合點か。身は急用事で立歸る。アノ體なれば腰拔に極つたれど念に念。隨分氣を付け告知せと。地毒を吹込高の左平太ゑつぼに。フシ入つて行醉たふりにて空寢入。見るとは知ぬ計が佛。蛇の目くりぬく曲り智惠。詞由良樣〳〵。サヽ起て今一ツ。是〳〵と。地脚て起して扨てもたわい。詞とんと氣遣ひない代物。落付山の時鳥。地氣骨折ずとお山か藝子か一疋しめて寢てこまそ。うまひぞうまひぞ。伽羅〳〵こんきやらけら〳〵笑ひ。いさんで奥へ行跡に。地藝子女郎がほら〳〵小裙。詞由良さんまだ寢てかいな。どれ二人してこそぐり起そか。イヤそれよりは目ざましの。時計のかはりに二挺の三味線耳につき付。くはん〳〵〳〵。ヲツトとふから起て居るぞ。ヲヽ負おしみ。さらば次手に連彈を承はらふ。何彈じやへ妹背川でもよからふか。可愛らしい物じやな。まだ居眠りかいな。ヲヽ聞て居るぞ〳〵。聞て入るさの障子より。もれ出る。月はさゆれど胸の闇。子を捨る。藪に生立つ村鳥。父よ母よと泣からす。詞ハア最ふ何時じや。追付後が鳴ませう。ムヽ夜半。大方今比はと。地思ひやつたる我子の知死期。胸に答へてほら〳〵〳〵と。歌俱に飽るゝ親心。おしの片羽のとぼ〳〵と。子に迷ひ行。小夜千鳥。地露の命の露の間を。おかるは茶屋のフシ庭先へ。詞申〳〵由良之助樣と　地い

ふ顔ちやつと。詞コリヤ〳〵〳〵聞に及ばぬ。戻れといふ使じやな。譬百度つかひが來ても。逝ぬ期が來ねばいつ迄も居續け。何にもいふな。往ね〳〵〳〵と。地何所へ取付島迚も。涙はら〳〵。詞コレ申。そりや餘まりお氣強い。地現在の子のお腹めすを。詞ヤイ〳〵〳〵そりや何じや。此面白い遊びの中でめろ〳〵と。エヽ聞へた。こりや臺所で呑だな〳〵。イヤサ酒呑だな。きやつ酒呑と泣上戸で。十年前の事迄くり出して泣が癖。くだまいて樣々の事を。ハヽヽヽヽ爰に居る所じやない。ナこりやサヽヽちやつ〳〵と　地逝とフシ紛らせば。地苦のない女郎中居共。詞こりや面白い泣さんに。一ツ上てわつさりと。わしらも泣たい。地サア〳〵一ツと無理やりに。フシしいる。盃。何の其の。地醉ていふ氣はよわいから呑ぬ先から氣違ひに。いつそ成てと胸を居。茶碗で二ツ重ね呑。醉ぬ心を醉になし。詞成程わたしや。泣上戸じや〳〵。是が泣ずに居られふか。地母御樣や奥樣のお心を思ひやれば。悲しうて悲しうて。お二人に成替つて。お迎ひに來た心。推量して御らうじませ。お前は何共ござりませぬか。わたしや胸がはり裂るわいな。ハヽヽヽヽ。詞ほんにきつい泣さんで。けふとう座がもてるはいな。地こりや呑るはと心なふ騒ぐ程猶。くみ出す涙。由良も聲こそ立ね共。胸にせきくる恩愛を。醉に取なし。詞イヤこいつはよい〳〵存分泣け〳〵。所望じやまちつと泣て聞し。朝野さん。何ぞ其處へ哀れなめりやす彈ておくれ。哀な事なら十三鐘。胸の調子は合ぬ同士。詞コレ申。夜半が鳴と水の泡。お前のお心一ツて。生る死るの大事の瀬戸。お歸りなさるゝ心はないか。どふでも殺すお心じやな。歌歸ろと泣ど返らぬは死出の山路に。迷ひ子の。詞いかにも殺す〳〵。斯う盛かゝつてからは。何ぼ可愛ても。殺さにやどうも座敷が濟ぬ。酒呑の茶屋の座敷は。戰場も同じ事。一寸も引れぬ場に成て。熱鐵のやうな酒を呑込。苦しみをナコリヤじつと答へる爰が辛抱。比興者と笑はれぬ樣に尋常に死。ハテ死ざやむまい我心。歌苔をちらす仇嵐。野邊の草葉に置く白露の。もろき命のはかなさよ。父は身もよも有れふ物か。お前がおつしやらいでも。國を出るから腹切と。覺悟して居るお子じや物。何の未練がござりませふ。ほんに〳〵其賢さ。わしや

死でも強い侍じやと譽られるが嬉しい。口惜いは爺様を比興者じやと笑ふたやつを。切殺して死たいと。地九ツや十の子心に。齒ぎしみしての無念がり。詞夫程迄に親御の事。思ふあの子をむごたらしい。助ける事が叶はずは。お前のお手て介錯して。出かしたとたつた一言。地いふて臨終さしてたべ。よく〳〵深い譯有る事と。わたしや思ふて居ますれど。我子の死るを見殺して。茶屋の座敷の其酒が。よふマア咽へ通ります。何ぼ武士でも胴欲な。ちつとは母御や奥様の。お氣にも成つて御らうじませ。餘まりむごい情ないと。酒に負せて恨のたけいふても返らぬ命の繼目。助ける筋はない事かとわつと計に。泣聲を。フシ一度にどつと高笑ひ。詞コリヤ刎ました。是からいつそ氣をかへて。踊りにせふじや有るまいか。サア〳〵女中様も踊いな由良様の三味線で。よかろ〳〵。さらば爰らで女中さんの泣踊はどふ有ふ。是もして見よかしのへ。龍田川には紅葉を流す。醉た女中は涙を流す。下戸も上戸も鬱子も仲居も手を揃へ。ソレ〳〵〳〵やつたとさ。詞コレどふじやいな。早めてせい。ソレ〳〵〳〵やつとさ。ソレ〳〵〳〵。夫鐘が鳴る。地アア心も亂れ手も狂ひ。今が我子の最期かと思へばさしもの由良之助。胸に燒金さす如く。見かはす互の目もうろ〳〵。詞アヽゑふた〳〵〳〵。地山にぞフシつきにけり。詞サア〳〵二人ながらきつい醉やう。水上ふか。御寢なるかと　地夫とはフシ心暫間も。地忠義忘れぬ大星力彌。息切戸口入らんとせしが。待て柴垣より音なふ小石。折こそ惡しゝと止る目先。見へもせぬ目を光らす座頭。詞由良様〳〵。さつきの返事はどふじやいの。朝野を抱て寢さらぬのか。寢させふ〳〵。したが御坊。此座敷に朝野が居るか。但しは居ぬか。ムヽイヤ慥に爰に居る臭がするはい。サアどこらに居るぞさいて見たり。夫が合たら直に抱て寢さすのじや。サア皆ついと並だり。子買〳〵。どの子が欲しいぞ。いつちの中の。此子がほしい。ハヽヽヽワイそりや床さんじやはいな。そんなら今度は。端から二番目。それも違ふた違ひ棚。此間にそろ〳〵はずすが大事。狀受取た先へ〳〵。地先へ〳〵と力彌にしらせ。あたりの人を散し書。地おかるが差出す釣燈籠。詞ヤア書置の事とは。お石様のと。地いふ口ちやくと押ゆる由良。上に

は座頭がつゝほりと。詞コリヤどふじや。皆どつちへ行おつたと。地柱にぐはつたり。詞はてめんよふな。こちらは縁先東は植込。此間が玄間。筋かいに侍部屋。横に取て長屋水門。爰が物置こちらが柴部屋。裏門は高塀。池を廻りに取かこむ。亭座敷こそ師直が。寢所の内と。地敵の案内。一々聞取る由良之助。詞ホウ早野勘平が兄早野和助。稚顔見覺へ有。堅固で有たな。ハア御推量に違はず。弟は先達て切腹。せめて五體滿足ならば我なり共敵討の御供と。思ひに甲斐なき其かはり。幼少よりの盲目を幸。鎌倉に下り。師直が屋敷へ入込お伽座頭。用心嚴しく女子供に至る迄。他所の者は一人も入れね共。盲の一德心を赦し。地奥へ通せば隅々隈々。目は叶はね共忠義の魂。詞足の歩みに何間何尺。地飛石の數迄も。胸に覺へた館の案内。詞とは知らぬ左平太のうつそり。由良殿の底意を探る。供に連たは最究竟。地お目にかゝつて心底殘さず。申上る我本望と明りをはしる座頭が忠義。詞ノウ是々〳〵。母御様やお石様が。お前を見限り自害するとの此書置。國元を立候迄はよもやと存候へ共聞しに勝る身の放埒。比興者にあいそ盡て。先立相果申候。シテ表門の間數は。百四十間東の高塀。西の裏手は長屋か塀か。皆折廻して平長屋。地辰巳角には櫓有。詞只悲しきは吉次郎。御身の心一ツにて。親子三人むだ死致し候事。只惜く存ず。地玄關見付十二間。詞侍小屋は南か北か。三方に取廻し。馬屋は西に武具の藏。うき恥を見よりも。冥途へ參つて殿様に。御奉公申たさ。地夫より廣間遠侍。詞扨は此間長廊下。地寢所は。別に數寄屋立。泉水築山其外に。逃てフシ隱るゝ所もなし。詞恨のたけは未來にて。敵を討は夜討の手配。ハヽヽヽ　地大望成就時至る。得がたき繪圖の出來するは御邊の手柄兄といひ。弟といひ。ケ程心を碎かるゝ亡君も嘸御滿足。こは勿體ない由良殿の。艱難辛苦にくらぶれば百分一の繪圖計。分相應の盲が忠義。夫を勵ます貞女の忠義。敵に墮弱を見せん爲。躰を見殺す我心。夫も忠臣。是も忠臣。生るも。死るも君の爲。地種々様々の浮苦勞も。侍の常。世のならはし。是ぞ本望々々と。泣ぬ表は武士の酒と涙に袖浸すフシ茶屋の。軒場の村時雨。詞案内知るれば片時も早く。地出達の用意心せく早野フシさらばと立出る。地庭

に仲居がばら〳〵と。詞是はお早い最ふお歸りか。イヤモ醉た〳〵。何時であろ。きつしり夜半こりや又餘り。さらば法師も送りましよ。地いなば橋迄送らんと夕月影も。雨ぐもり。お近い内には。今生の別れと。後に三重へしられける。地別れ道より逸散走り我家の内にかけ入て。見るもいぶせや佐五兵衞が。膝にかき乘吉次郎。疊にしたゝる血は紅。反古障子も隈取血煙。ノウおいとしやと泣おかる。詞ヤア見苦しい。稚けれ共侍の。切腹の場に女は叶はぬ母人の介抱申せと追立やり。躰が小腕に手を持添。介錯は聞へたが。迚も切腹さすならば。なぜ再び生ぬ樣には介錯せぬ。但し所存有てかと。地星をさゝれてハツト計。詞御推量の通り。既に斯とは存たれ共。花の樣な若旦那。餘まり惜さ勞しさ。急所を除て御介錯。主人への申譯は。佐五兵衞が此血汐と。地肌寬ぐれば血は瀧津瀨。切も切たる十文字。詞由良之助樣。御子息吉次郎樣の。お命の瀨戸に成ても。御心底を明されぬは。下郎めが魂をお疑ひなさるゝ。深き御賢慮でござりませふ。他言致さぬ潔白は。腸を掴み出して誓紙の金打。吉次郎樣のお命は。どふぞ　地是でと跡得言ず。思ひ込だる忠臣に。感じ入たる由良之助。力彌參れと吉次郎が。腹にしつかと絹引しめ。詞連佐五兵衞。元御一家の石堂殿。包み隱すもけふ限り。今日只今敵地の案内知たれば。今宵直樣發足すれば。敵の首を見る事も兩月は過すまじ。最早心底打明す。母人女房。誓氏の血判受取たり。對面ぞふといふ聲に。地障子明れば母お石始めの姿其儘に。夜討の裝束仕立際。おかるも俱に　フシ手利の縫針。地中にも母が勇聲。詞親が死でも子が死でも。大事を明さぬ其丈夫。そふなくば大望は成就せまい。そなたの母女房じや物。敵の首を取たといふ。便りを聞たらそこでこそ。夫迄は中々何のうかつに犬死せふ。地障子に書れし樂書に。皷の大事は三ツ地に有るとは。敵を討を皷に寄。密事を口へ出すなと心の禁め。地血をあやしたは女ながら。神文の此血判義臣の中の我々が。仕立た裝束。詞もふ氣を置ずと早打たちやと差出す。地ハ、、、、、親の心魂こめられし。奬噌が母の衣。夜討の　フシ門出　忝なし。詞コレ吉次郎が手も淺し。心底明せば石堂殿へ大星が返事も立。薄手の血汐は汝が血判。助ける命は佐五兵衞が未來の手

向。ハア有難や。それ聞て直に成佛。和子達者で。地せめて一人は忠臣の。お胤が殘つてフシ下されと。地今端の際迄主思ふ。他家の忠臣我迚もやがて冥途で對面せん。道は一筋三途の首途さらば〳〵〳〵の聲殘す。義臣の胤の稚子は今に命を壹岐の國。二代の大星手習の。忠義のいろは星兜夜半に紛れて三重へ立か弓。

## 第五

地柔能剛を制し。弱能く強を制するとは。張良に石公が傳へし秘法なり。鹽冶判官高定の家臣。大星由良之助是を守つて。既に一味の勇士四十餘騎獵船に飛乘て。笘深くと稻村が崎の油斷を見すまし。フシ岸の岩根に漕寄て。地先一番に打上るは。大星由良之助義兼を始めとして。原郷右衞門大鷲文吾。跡に續て竹森喜多八。奥村川瀨片山源太。列を亂さず立出る。假名實名袖印。鎖袴に黑羽織。忠義の胸當打揃ふ。其數四十六人なり。何れもいろはの合紋に。天と河との合詞。詞忘るな兼ての言合せ。矢間千崎小寺のめん〳〵。躬力彌諸共に。表門より早入たり。郷右衞門と某は此裏門より込入て。地相圖の笛を吹ならば時分はよしと乘込よ。取るべき首は只一ツと。由良之助に下知せられ。怒の眼一時に。館をにらんで浮立つ勇士。早表門より込入る人々番人に案内させ。裏門口の門はづし。ひらけば外に待兼しと追々に込入たり。裏と表も吹合す相圖の呼子天河の聲フシひゞかして亂れ入る。地スハ夜討ぞと松明挑燈。一方は郷右衞門。一方は由良之助床几にかゝつて下知をなす。小勢なれ共寄手は今宵必死の勇者。秘術を盡せば由良之助。詞餘の者に目は掛そ只師直を討取れと。地郷右衞門諸共に八方に下知すれば。はやり切たる若者共もみ立〳〵三重へ切結ぶ。地寄手は纔二三人薄手負たる計にて。敵の手負は數知ずされ共大將師直と。思しき者もなき所に。矢間重太郎重行。師直が衿がみ摑み宙に引立引ずり出し。又も呼子を吹立れば。大星親子郷右衞門フシ追々にかけ來り。地由良之助とつくと窺ひ。詞下には白無垢綾の上着。眉間の愈疵まがふ方なき目ざす敵。サア何れも日頃の鬱憤此

時と。地由良之助が初太刀にて。浮木に逢る盲龜は是。三千年の優曇花を見たりや嬉しや と踊上り飛上り筐の刀で フシ首打落し。地鎚先にしつかと突さし。四十餘人が勇の姿。末世末代傳ふる忠臣。忠義に光る大星が。名は萬天に 耀かす光明寺へと三重へ行空の。實に公の御政法治る御世の足利氏。記錄所には飯田多門の頭子息左近金澤彈正相 伴ひ。鹽冶浪人四十餘騎夜討の子細御改め。皆それ〳〵に御預け。未だ成敗定らず。銘々評議有るべしと鎌倉御所の 評定所。威義を正して出仕ある。當番の取次罷出。詞攝州難波の町人淀屋古庵。參上と相述ればと。地早々是へと仰 を傳へ。年は六十の五調作り丸い天窓を金の間の フシ御白洲にぞ畏る。地彈正屹見。詞淀屋古庵とは汝よな。其方が 家には金の鷄迚。千萬金にもかへぬといふ寶有由。此度足利殿先君の御吊ひに。此名畫を掛られんと其方へ御誂下 る。彌〳〵其一軸是へ持參致せしか。ハア仰迄もござりませぬ。町人の家に傳へし物。室町樣の御上聞に備ゆるとは何 よりの面目則ち僖宗皇帝の御筆にて。朔日の曉には。一聲鳥の音を出すと。申傳へますれ共。先祖より藏に納め。 常に出す事なければ。聞たる者もなけれ共。地御上聞にて御試下されかしと。一軸の箱取出し差上る。地折から奥 より小姓衆。御誂意なりと手をついて。詞鹽冶家中の者共人を殺す科人ながら。敵討といふなれば。今迄に沙汰なき 仕置如何有ん。銘々に入札にて。御了簡を御申有べしとの。御事なりと有ければ。地左近臆せず進み出。地若輩の拙 者憚り多く候へ共。主人の敵を討たるは忠臣の 侍。是を殺さば天が下に。忠義の武士は候まじ。四十餘人の者共殘 らず御助け有て。然るべく存じ奉ると。地事もなげに フシ述らるれば。地彈正席を改め。詞アヽいや是左近殿。其 元は御若年なれ共御親父の御子息なれば疎略の事は申されまじ。古へより謀叛徒黨の類ひ。一人も助け置るゝ謂な し。遮て助けんとは御親父の御了簡か。但し貴殿の思召かと。地角有詞を多門の頭。耳にもかけずにつこと笑ひ。 詞若者の評議取上て言ふに足らず。由良之助を始として。敵を討たんと思ひ立より。命生んと思ふ者。一人も有べ からず。たとへ御成敗なき迚も。銘々自害し相果る覺悟の武士。切腹仰付らるゝは。彼等が本望去ながら。敵を討は

忠義の道。謀叛徒黨の類ひに有ず。アレ見られよ。評定所に書付たる。先君尊氏公制止の條々。武士道は忠臣を專とすと第一に記されたり。忠義を立たが科と言ば。アノ書付の面は反古。掟書に僞り有ては世上の嘲り政道の妨。今より忠臣を專とするの。此四字を削るべし。四十餘人が命にて忝なくも日の本の。國の掟を改さする由良之助は。地遠器量の侍やと。只一言に忠臣の武名は末世に動きなき。國家の四天多門の頭。フシ其程々は備はりし。奥より出る小姓衆。黄金百枚臺に乘。詞淀屋古庵。珍敷一軸を差上たる恩賞に。下し置るゝ頂戴せよと。地諚意は面目身に餘る。古庵白洲に頭を摺付。ハヽア有難き仕合せに。付上つて一ツのお願ひ。恐れ多き事ながら。此御褒美を外の品に。御かへなされて下されたし。金は世上の寶とは普く人の知所。此度義士の面々の心ざし。金にも玉にも替がたき。四十餘人の石碑の施主。私に仰付られ。地夫を今度の御褒美に。遊ばされて下さり フシませと願ひの趣。多門の頭一々に聞屆け。町人ながら義に感ずる優しき性根併ながら。詞一旦頂戴せし物を。辭退申は恐れ有。則ち其黄金を以て。石碑の料と致すべしと。地仰にはつと悦びの。前後 フシ白洲を罷り立。希有な願ひは難波津に。名をしられたる長者の氣性。殘る石碑のいろは藏立別れてぞ三重〈行空の。

## 第　六

地月は武藏野水は京。何は兎も有。難波津は。胸の大坂大分限。年中絶ず國々へ。廻るや淀の爲替金。富にあかせし物好の數寄屋の掃除小坊主が。朝から晩迄挽茶臼。しんきな事と謡いて。ふくら雀は風に揉るゝ。フシふら〳〵眠り。地家にもまるゝ柳腰。年若ながら賄ひの數にも入しお次迚。器量も揃ふ利發者。詞コレ伊才殿。茶は挽いて居眠つてばツかり。手代衆に呵れさんしよと。地氣を付られてへらずロ。詞何の手代衆がおれ呵る事はならぬ。高でてきらは雜用方。町家でも此淀屋は大名格にかゝへて有此茶道。茶人は寢ながら飯を喰。寢ると喰のがおれが役じや。何

いはんすやら。居眠つて居て其樣に俄に引と。茶が荒う成わいの。イヤ。惣體茶臼は緩々したり。又急にしたりするので能うなる。先度も此茶の間で。こな樣と若旦那樣とが。丁ど此茶臼なりに。シイ〳〵。おつと言なら言ぬが。おりやよふ知て居る。慮外ながら若旦那のお傍家老。おれを小坊主じやといふて丁稚共が侮る故。コレこふいふ物拵へて置た。此鬚鬘を斯すつぽりと天窓にかけると。ナント能男で有ふがの。アノ番頭めが直似して見しよか。朝は二日醉のしかみ頰を紛らかそう迚猶け悪う。ヤイ。女子共は又二階這入か。いつ迄髪にかゝつて居るぞ。なぞとぬかす癖に磯せゝりが大好。夫といふが虱の皮清九郎とはよふ付た。可愛そふに丁稚は殘らず痔病にして。畳は其顔もせず。コリヤ子供。たばこ盆仕廻ふたら三の段さらへて見よふぞ。おれが目をふるとのらばつかりかはきおる。翌日から宮芝居へ這入たら。躾にして縛り上るぞ。番頭じやぞ〳〵。地身ぶりして居る後ろから。詞そりや誰が眞似じや。ハアなむ三。イヤこりやアノ。芝居の敵役。藤川清九郎が眞似じや。ごくどうめ。今番頭とぬかしたは。ヲ、それ〳〵番頭岩五郎。地まだぬかすかとぐつとむく。目玉は中村。嘉七茶ひきや。地こちや往て寢よとフシ逃て行其ほうげたをと追廻すを。モウよいはいなと妙に。抱留られてぐにやとなり。詞吾儕の詫言なら聞てやろ。地代りに斯じやと。フシ抱付ば。詞ヲ、コレ何なされますぞいな。内の衆の躾するお前じやないか。アタ猥な。あほうらしい。コリヤ言ふまい〳〵。吾儕は死れた番頭の娘。兄の新兵衛は引負して仕くじつたれど。妹は隱居の目鏡に叶ひ。妙なが内の目になる役じやないか。其身を以て。アノ若旦那辰五郎樣に。ア、是なあ。いろ〳〵のないもせぬ事を。どこへ〳〵。慥な事にらんで置た。そりや主命なら是非もなけれど。ありやほんの榮耀が餘つての抓み喰。犬に喰れたも同じ事。よはい者が歩に取れると。詰る所はわれが追出される樣になる。そこをいふて貰ひとむなくば。コリヤ已にもちつとばかり口錢を刎させい。おれが呑込みや知人はない。たつた一膳で了簡すると。地色事にまでかすり取手代の附目。付廻されて廻り緣。出合頭は丸けれど。家の柱の禪門古庵。ソレ隱居樣に惚りあはて。詞ヱ、お次とした事が。天井

の埃拂ふのに背が足ぬ。抱てくれてゝ。へゝゝゝ。ハゝゝゝ。ホゝそうかしてお次がめつたに體を震ふて居る。其樣に隅々迄掃除仕過ると。樣々の穢い物が出る。家の内は何事も大目に見ねば支配は出來ぬ。今度三十日計他國して居た中。若世なれば取締も有まいと案じて居たが。思ひの外辰五郎が神妙に屋敷勤もかゝさず。其外は内を出ずよう留主をした噂。戻つて見て安堵した。併此間は居間へ引籠つて書物計見て居るそうなが。氣がつまつて病などは發らぬか。お次隨分氣を付て京庵でも呼にやらふか問ふて來い。地ハイ／／何がな座の立しほ。フシ溜息お次へ立て行。地表の間より二番手代の藤七。詞只今壹岐の御家中衣笠萬右衞門樣。隱居樣にお目にかゝりたいとでござります。ヲ、玄關から是へ通しませい。清九郎。夕飯の用意言付きやれと。地待間程なく年榮も。三十餘りの國侍。四寸廻りの拜領紋。羽織袴も田舍びし。地九州訛りのしら聲にて。詞御家來衆。其半櫃これへ直しておくりやれ。地心得手代が二人して。襖づらに舁居れば。詞是は／／よふこそお出下されました。お國の御用は承はれ共廣い御家中まだあなたには終に御對面申ませぬ。成程々々。ナニ其元が淀屋の古庵殿。拙者衣笠萬右衞門。以後は互に御懇意。扨其元には此度鎌倉より召出しに預られ。お家の一軸を献上と承はる。先以御大慶。此半櫃は用意の品是に付てちと密々に貴意得度事有て。只今藏屋敷へ着と其儘伺公致した。ハテ夫は御苦勞樣。御内々と有からは。今晩は是に御一宿。私隱居はあちらの離れ家。ア、いや先承はり及んだ御普請の樣子。お庭廻りもちと拜見致したい。イヤ是はお恥しい。ソレ藤七。御案内申ませい。地かしこ鞠場の掛りから水晶の透し窓。伽羅建の亭座敷で。御酒一献と。フシ打連行。地清九郎は心の工面。フシ奥口見廻る小庭先。詞清九樣／／と。呼ぶは表具屋長右衞門。傍りを見廻しひそひそ聲。詞扨別の用でもないが。此掛地持て參つたと。地風呂敷ほどけば惚りし。詞コレ／／／／。夫爰へ持てくる所か。何の爲に。サアそこじや。此金の雛は淀屋の家の寶物。お前のお頼故去似物師の銘人に。寸分違はず拵へさして上ました。其跡で掛地をちつとの間預つて置てくれいと有故。今迄留て置ましたが。よふ聞ば彼似せ物が。鎌倉

へ御献上になつたげな。お前の心は知ねば共。どふやら小氣味の悪い代物。お前へ戻しにさんじました。ア、是やくたいもない尻も宮もくる氣遣ひない。追付其掛地はお大名へ賣付て大金にする。其時は貴様もずつしり。イエ〳〵もふもふ〳〵ふつとそう氣が付出してからは。片時も預られぬ。ハテ悪い合點。マアもちつと。イヤ〳〵最お返し申ましたぞ。跡の尻は知ませぬと。地尻に帆かけて フシ逃歸る。地エ、邪魔な所へ大事の物。どこに奥から隱居の聲。清九郎〳〵。詞ハイ〳〵〳〵もふそこへ敗亡し。手に持ながらうろ〳〵と。置端に事かく天窓かく。あはてまへなる數寄屋の額。隱すも赤面咳拂ひ。騷がぬ顔で入にける。地淀屋の水に男ぶり。氣の美しいさま育ち。辰五郎は此頃より。立籠つたる居間の中。襖押明座敷先。我家ながら。心おく間の戸障子しめやかに。人なき數寄屋のくはとうより。手を取り伴ふ品形。武家物好の大振袖。世二相蟬蛸と。月の細眉うづ高く。フシ雲間を出る其風情。恭々敷上座に直し手をつかへ。詞嘸御窮屈にござりませふ。誰有ふ伯州の太守。鹽冶判官高定公の御息女勝姫様。父君は不慮の御切腹。四十餘人の家中の人。念なふ敵は討れしかど。鹽冶様のお家は立ず。由良之助殿を始め。忠義の衆中は皆殉死。地誰有て姫君を守奉る人もなく。爰かしこに様々の御艱難。詞不思議の縁で此辰五郎がお目見へ致しもとより御一門のお家は私のお出入。捨置れぬ御恩の家筋。密にお供し歸れ共。高が目せまい町人の内。見咎められては詮なしと。手廻りの者をも遠ざけ。私が居間にお置ひ申上るも世の成行。親共にも此事を打明さふかと存れ共。親子の中でも本心の程は計られず。隱し忍ぶ心のせつなさ。地朝夕の御膳迄勿體ない私が。定器の膳で差上るも。詞内外の者にもしらさぬ祕密。一城の御主。世が世なら我々が。物申事も叶はぬにと。地思ひ廻せばお勞しさ。御先祖の御無念迄。推量申て憚りながら。毎日泣てをりまするとと。聲を忍びの男泣。地いつの間にかは次の間に立聞く衣笠萬右衛門。扨はと感ずる其氣色。フシ猶も洩聞姫の聲。地同じ木草もさま〴〵に。かはりし色は有ならひ。御身の様な情有。誠な人も有物か。詞餘り其深切に餘つて一ツの頼み有。ナント聞て下されぬか。是は又御念の入た。是程にお世話申私。何事で

も承はらいでは。しかとそうかや。氏神も御照覽。ヲヽ嬉しい〳〵。フシ恥かしながら。詞わしやこな樣に惚ました。エイ。女夫に成つて貰ひたいと。思ひがけなき詞に悔り。詞ソリヤ何を御意遊ばす。恐れ多い我々が。イヤのふ。戀に上下の隔はない。自が母樣は御湯殿。下仕への女子でも。大名の妾に成も有り。殿樣お果なされた上は。地たとへ世に出たといふても。なま中な小身の。武家へ嫁入は口惜しい。たとへ賤山がつでも。其頼もしい心が系圖。氣立といひ殿ぶりは公家高家にも。有まいと。ふつと見るから思ひ初。忘るゝ隙はないわいの。詞斯う思ひ詰た上からは。いやと有ば此通りと。地ひらりと見へし守り刀。詞母の讓りの此懷劍。言出した事飜さぬは武士の娘。わしも自害し。こな樣も生ては置ぬ。サア〳〵何とゝ。地情變じて双傷に及ぶは遺鹽冶の血筋。相人かはつて辰五郎。大汗たら〳〵。詞是は又御短慮な。マアお引なされ。どう成共致しまするとと。地詞の内に奥よりも。鷹千秋萬歳の千箱の玉を奉ると。地聲諸共に何國より。檔揃ふ女房達。島臺長柄取々に。フシ儀式を立て控へ居る。地萬右衞門謹で。詞辰五郎殿。最前より承はつて感心致す。拙者主人は鹽冶の一族。判官殿妾腹の。姫君有りと聞及び。御行衞を尋る所。貴殿匿ひ置れし由。ほのかに聞付。元來主人の了簡にも。家絶たる鹽冶の娘。尼法師になすも不便。町人なれ共淀屋事は。筋目有る家筋。事の品に寄つては。緣邊を取結べと仰に寄て。是なる女中は局頭。岡野谷秋篠兩人を指添らる。然るに姫君の御心も。言合さずして合たるは。誠に神の御媒妁。則姫の嫁入小袖。十萬石の主人が娘分として指遣はさるゝからは。辰五郎殿は。主人の聟君同然と。下る額に。地辰五郎重るおもりに返答も。フシ出兼るこなたに。隱居の古庵走り出。詞ヤレ辰五郎。わしは手柄な者じやぞよ。此親父もどふぞ躰に筋目の能い嫁が取たいと。常常の念願が。餘まり屈き過て。大名の娘を女房に持といふ樣な。めつそうな事が有物か。とは言ひながら一世の外慶。添けない〳〵。お姫樣よう惚てやつて下さりました。大名の聟なれば。贋膏の白無垢。拜領の御紋付。ケ樣の爲に拵へた。唐木作りの書院にて。祝言の壽。今夜計は諸事大名の。まなびをするが嫁君への御馳走。萬右衞門樣。女中

方。御案内の通りに。お取計らひ下されい。御苦勞〳〵。是は〳〵。御承知有て拙者も大慶。是が承知なふてたまる物か。辰五郎。冥加恐ろしい女房持て。落馬せぬ樣にせいと。地ほや〳〵機嫌餘念なさ息子は一ゑん濟ぬ顏。姫は今更恥かし顏。あぢな鹽冶の御新綴。女房達が梶取て。淀に打込む戀の網フシ打連立て奥に入る。フシ物音遠く聞へねど。お次は何やら氣がかりに行つ戻りつ案じ顏。詞最前侍衆が來てから。襖を立切。旦那樣や隱居樣は。何咄ししてござる事。地樣子有磯の海ならで深へり疊そろ〳〵と。襖細目に指覗けば。詞ヤア何所からやら女中がたんと來て。そしてありや祝言じや。サア〳〵氣疎い事じや。デモ先度から沙汰もなし。何の事やらすつきりと。地嫁御の顏は遠目にも。アタ美しい事はいのと。何所やら小腹立迷ふ向ふへくるは清九郎。ヱヽうるさやと身を隱す。數寄屋のフシ壁の宿り蝶。地祝言濟で仲人はよい上首尾と小座敷へ。座を辰五郎言合せの。工合も丁ど清九郎が。詞旦那首尾は。よかつた〳〵。雛路おじや。地大夫〳〵に勝姫の上着フシほら〳〵かい取裙。詞モウ碎けてもだんないかへ。最ふよい〳〵。引船の綱やり手の高。局役太義々々。取分てけふの出來頭は。此人の萬右衞門役。イヤ其筈でござります。此わろは源四郎と申て私が念頃。お前方へは今日初めての新役者。根がざぶの果でゑいやつとうも少し有げな。サアそこで今は。町辨慶兵法の棒。ハヽヽヽきやつを立物にしてけふの作者は此清九郎。雛路樣の身請はとふにしてあれど。隱居の片意地者が。侍の娘でなけりや辰五郎が嫁にはせぬと。系圖吟味ばつかりする。夫からの思ひ付。鹽冶判官の姫君とやりかけたら好のつぼじや物かぶらにやならぬ。イヤ又太夫が姫を出かした。いやとよ自が。なぞとやつた所は可愛そうに仕おるはい。何言なますやら。わたしや剛ふて震ふて計おりました。わしや否と言ふのにゝ振袖着にや姫の樣に無てゝ。我身ながらヲヽ恥かし。イヤ夫よりは太夫樣と違ふて。終に着た物もない襠で一倍汗に成てノウ高主。イヤもふわしをやり人といふけれど。いとしぼなげに御隱居樣を。お前方が餘まりなやり人。そしてアノ大名に鹽冶といふ家名が有かへ。サイノ判官といふ替名も。呼にくひ誹名じやぞへ。コリヤ〳〵内はから惡口い

ふな。何にも角も鹽冶樣でやり付た。ゑんやのてこじやひんよい／／。ヲ、夫で思ひ出した。俄のかし物物やで借て來た此大小。是から直に返してこふと。地二本からげて引分。ヲシ出行緣先。地手代の藤七旦那是にと立出れば。俄に屹居住居直し。詞コリヤ／／藤七。餘り仰向な御前じやぞ。ハイ御膳はまだでござります。イヤサ鹽冶樣の姫君の御前。ハ、ア憚り有や冥加なやと。地辭宜して見せれば呑込大夫。詞のう藤七とやら。けふ自が參じた事を。必ず人に言なますな。イヤ鱠は朔日に居へまする。こいつは一向赤素人じや。そして何ぞ用が有か。ハイ變つた事がございます。最前あなたの名は衣笠萬右衞門とおつしやりましたが。たつた今又れつきとしたお侍樣が。衣笠萬右衞門只今國元より着致したと。表へお出でござりますと。地聞いて悔り。詞ヤアそして今表に待て居るか。イヤ直樣藏屋敷へ參る。此狀を古庵殿に渡してくりやれと。直にお歸りなされました。此狀を親旦那へと。地立て行を。詞ア、コリヤ／／其狀親父に見せないやい。デモお目にかけにや分りませぬと。地言捨奥へ走り行。詞サア／／大きな事に成た。贋萬右衞門の詮議のない先。地ふけるが勝とヲシ逃て行。地コリヤ／／／われが逝ると言譯の種がないわい。待て／／。清九郎が思案が有。其思案より私らは。マア大夫樣連て逝。辰樣さばへ。コリヤ待てくれ。大夫より何より。おれが爰には居られぬわい。ヱ、便りない事計。コレ思案はどふじやいな。サア清九郎が思案といふは。地おれから先へとヲシ逃散走り。詞跡に四人がふり殘され立そこに辰も立かぬる。暫く有て隱居の禪門。一間の中よりごほごほと。咳も我身にどうづきと。逃も得やらぬ辰五郎。見向もやらず。詞藤七／／。わりや宿老組中へ行て。躰辰五郎今晩勘當致したと言ふて來い。地ハイ／／とは言へど氣の毒顏。詞お次よ。辰五郎が羽織と下とが居間に有ふ持て來い。ハイ／／。ヱ、泣ずと早ふ／／。ア、いか樣太子樣が。子孫あらぜじと仰した筈じや子を持は先祖への不孝。コリヤお次。そちが兄の新兵衞は番頭の子なれ共。若氣の傾城狂ひ故傍輩の見せしめに六年以前隙やつたが。今の躰が事を思へば萬分の一。我子の事は目に見へず。勿體ない大名の名を術。假にも高家の祝言のまねびさした親も馬鹿

者。萬一世上に此事が聞へたら家斷絶はしれた事。けふから此古庵が元の淀屋辰五郎に成て。還俗して屋敷勤足骨の續くだけ歩行て家を立るが先祖へ言譯。地死だ婆は仕合せ者。六十に餘つて息子に世を讓られる。因果な親父が有物か。一人者じやとあまやかしたが其身の仇。詞親を欺すは大事なけれど。世間の人を皆親じやと思ふて。衒をする樣に成たら。滿足に生れた體が終には木にさらされ居ろと。夫がおりや不便なはい。地他人の事は構はねど。迚も腐り合た緣ならば。好いたお山と飽飽れず。何國の浦でも添遂て。長生仕おれと親の慈悲。詞少なに泣目を拂ひ。フシ紋付羽織下袴。脇差ぼつ込。詞今日から還俗の間に合髮は有合す。子供遊びの奴鬘。坊主天窓に引掛て。詞藤七供せい火の用心氣を付いと。地達者を見せて恩愛の。涙をぐつと一息に フシ飛が如くに出て行。地雛路は道理にあやもなくお情餘る御勘當。皆私故に發つた事。コレ申お次樣とやら。折を見合せ辰樣の。御機嫌直る取成をと。賴む大夫も賴るゝお次も如在ないじやくり。婢女子の身を卑下し。譯有る事も今更にいはで心の暇乞。此上ながら雛路樣。且那樣のお力に。なつて上てと見かはせば。俱に身かへる辰五郎。身の誤りに フシしよげ鳥や。地引舟やり手も俱涙。あつたら廓の粹さんを。粹過た身にした事と。裏に入切たてんば共。形は時代でねり物の雨に逢たる如くにて。泣々フシほれ別れ行。地お次も心は諸共に付いて行たさ後影見るめ涙の敷居の上。落たる狀は。詞ヤア御隱居樣の御手跡。書殘す一通。此度献上の金の鷄。鎌倉にて目利者に見せ候所。似せ物に相極り驚き候へ共。献上の日限延がたく似せ物と知ながら指上候。もし此とがめ參り候はゞいか體の過意もはかられず。夫故に辰五郎を勘當致し候は。此難義をかけまい爲。猶行末を賴み入候。ヤア扨はそうしたお心か。地お慈悲の上のお情を。あだ疎に思すなと言ても屆かぬ女心。フシ只伏拜み伏沈む。地手代の藤七色青ざめ。有頂てん〳〵舞戻り。詞サア〳〵大きな事が出來た。お上からのお咎めで。隱居樣は代官所へ只今お召し。どうでも今日の大名の尻じやそふな。此家へも迫付役人が來るであろ。アレ悲しや。地もふ來るそふなと狼狽騷ぎ。フシ迯て入る。詞ヤア隱居樣のお身の上。氣遣はしやとかけ出

す。地賺ひつたり清九郎。詞コリヤ色め。われは己が連て走る氣遣ひせずとちつとの間。地隱れて居いと無理無體。有合ふ半櫃打込で。ぴつしやりしめこの先第一。大事の物は此一軸と額の間から取出す。魂宙に飛石傳ひ藏の金箱ばつた〳〵。當り次第に投出し。錠前かたはし打碎く。ごろたの石より澤山な金の入物財布はなし。日覆ひの幕引ばづし。箱から直に打明る。板銀小判山盛に力一ぱい積かさね。手早く包む風呂敷を肩にしつかと横道者。餘つた小判袖袂腹も背中も金だらけ。立んとすれば南無三寶。金につられて身動きならず。どつこい爰じやと一生の力をきばつて腰に入。ウンと忽べつたり尻餅。頬に不動のフシかな縛り。地悲しや入來る鄕役人。詞家內改め詮議せい。此半櫃は道具か衣類か。改め見よと蓋引明。こりや何じや。奉公人には構ひないと。フシ猶奥深く込入ば。詞コレ〳〵お次餘まりしまつて解かれぬ。此風呂敷といて給も。ヱ、そこ所かそんな事しらぬわいなと突やられ。地轉る拍子に落たる掛地。庭へつゞいて驅出すお次。とめる袖から小判の包。とけてばら〳〵役人が。詞こりや何奴と踏地飛し蹴らるゝ度に山吹おろし。拾ひ集めてフシ落て行。地折から來かゝる源四郎。詞コリヤ〳〵〳〵。今そつちへ行た女子めが大事の掛地を持て居る。ぼつかけて取返せ。ヲ、合點と尻引からげ。地跡白波の淀屋の家亂れさはがし　三更へ行すゑは

## 第七

歌さまと寢たればおちやこのどつこいお手枕。更て泣出す睦言に。アヽよい〳〵〳〵〳〵。よい世の中じや。船に寢ねすりやおちやこのどつこい楫枕。ゆられゆらるりや。又口船の。アヽよい〳〵〳〵〳〵。よい世の中じや。よい世の中を渡り兼。地宿がへ船のかさ高に。世帶道具の數々を罪も。報いも夜半の夢。嗅が綱手にフシこがれよる。詞コレこちの人新兵衞殿。ちつと性根を付たがよい。何を言ても正眞の白川夜船。これ〳〵と起されて。地ウヽン

とふん反る大欠伸。詞ヱヽ、味い最中を起しおつたはい。ドレ目ざましに一服と。地目をすり火燧かつち〳〵。詞又其様に船引腰は。柳の風にもまるゝ氣色。たゞの嘸とは思はれぬ。イヤ夫で思ひ出した。爰でこそ此瓢簞酒。コレ嘸。其縄をそこらあたりへくゝり付。爰へ來て一ツ呑みや。又こふ見はらした所はどふも言へぬと。地さいつ押へつ盃に憂さも忘るゝフシ計なり。詞斯うした所は新住の月見。山崎の船遊山も及ばぬ。尤今は其方も只の嘸に成。襠はなけれど。ハテこちの心で。昔の道芝太夫じやと思ふて居りや又改めて惚けがさす。何をじやら〳〵言んすやら。わしやそんな機嫌じやない。宿かへて行先も知れぬ故。大事のぼんも乳の有所へ預けて置た。それはそうじやが。コリヤまあ何所迄私に引すのじや。ハテ何所の彼所のはない。明家の有る所迄引て行。地ヱヽ、しんきなと女房が。心も細きもやい綱。又解ほどき引舟の。詞ほんに何ぼの宿替も見たが。此様に夜の内から盗み物退る様な宿替が。何所の國に有る物で。今迄居た八幡の家主。町所へも知せず。欠落じやの走つたのと。人の口には戸が立られぬ。宿替て行木幡の里。先に當がござんすか。何をいふぞい。月の内に二度程づゝする宿替。當が有てよい物か。負ふた所の借錢は山城に井出の里。八幡山崎長居は恐れ。廻らば廻れ。ヲヽ、氣疎。謠ひ所かいの。利口そふに道具の上乗をすると男だてらぶせふかまへ。女房に骨折してほんに人が見たら笑はふ。ちつと替つて引しやれと。地わいがけ拔ば。詞アヽコリヤ待て〳〵めつそふな。神代以來男は乗物に極つて有。最ちつとじや精出し居れ。歌嘸は可愛や世に有時は。引舟連てかいどり小裙。今は引替船引兼て。辛度そふに見ゆる。見ゆるかの。おゝてや。岸を傳へば茨がとめる。男思ひの柳腰。山も帶する夜明の雲。堤傳ひにうろ〳〵としどけなりふり頻冠り。爰ら目なれぬ風俗に。こなたも道粋の果。船引ながら立寄て。詞ヤアそなたは松野じやないか。そふ言しやんすは太夫さん。地おなつかしやと縋り付暫しフシ詞もなかりけり。地おもよは不審立ながら。詞久しう顔も見ぬ内に。扨も大きうなりやつたの。マア何角差置此姿どうして爰へと尋ねられ。地雛路も漸〳〵心をしづめ。詞サア咄せば長い事ながら。突出しの其日より。不圖逢初

だが深い縁。可愛らしい殿御じやと勤はいつそ餘所に成り。地外の揚屋の門口は假にも越た事もなふ。長の年月揚詰に末は女夫と言替し。終には身請の相談故わたしや嬉しふ思ひの外。親御樣の御勘當。私も廓を拔て出て行先知ぬ二人が事。頼上るは太夫さん。能い御思案して下さんせと。兩手を合せさめ〳〵と。頼む身よりも頼まるゝ。おもよは心根思ひ遣り。俱にフシ涙を催せり。詞ヲヽソリヤ氣遣ひ仕やんな。斯う廻り逢からはそなたの事は呑込だが。そうして其殿御といふは何所にじや。サア其お方はナ。終跡の松原で先へお出たと思ふた故。脇目もふらず此堤を。尋て來ての此しだらと。地咄す中にも氣はそゞろ。先を見跡を眺めやり心遣ひぞフシ道理なる。地辰五郎は後ればせ雛路を尋るおろ〳〵顔。頼かぶりして逸散に走りかゝつた目當の船。飛乘音に目覺す新兵衞。詞どめつそふなわろでは有。味ふ寢入て居る所へ斷なしに。マア第一船がたまる物かと。地咳きながら起上り。互に顔を見合して。詞ヤアそちは手代の新兵衞じやないか。そうおつしやるは若旦那。雛路もそこにか辰五郎樣と。地嬉しさ剛さかきまぜて。胸もフシときつく計なり詞そんならそなたの大事な殿御といふは。淀屋辰五郎樣か。是はしたり。夫なら彌お世話申さにやなりませぬ。フンそりや又どうして。ハテ淀屋のお家はこちの人の爲にはお主樣。今女夫が此樣に添ふて居るもお主樣のお影。スリヤ辰樣とは主從かへ。是は不思議な縁じや迄。そんなら彌睦じうお頼み申は太夫樣と。地語り合ふ程女同士。新兵衞膝すり寄せ。詞斯うお目に掛る上は。大恩のお主樣。どんな事がござつてもお世話致さいで何とせう。則あれが私が女房もよと申ます。古へは新町で道芝太夫と全盛をやつたなれの果。扨はこなたが道芝か。スリヤ雛路はこなたが遣ふた禿の松野。是は〳〵繋がる縁とて猶面白い。先何角差置て頼たいは雛路が身請。千兩に相對してもう濟て有と思ふたが。思ひがけもない尻が來た。其譯といふは手代の清九郎めと黠頭合。よつてたかつて三千兩じやと內の手前を言なして分取に仕おつた。そこで雛路を連て逝ると。大勢人が廓から。コリヤたまらぬと二人連の欠落。所で頼むといふは爰の事。どうぞ雛路が身請金。千兩程借てたもらぬか。ハイ。ようござり

ます。淀屋の手代もして來た新兵衛。私が請込ました。そんなら得心してくれるか。成程何事も此胸にと。地借錢だらけで宿替の中へ無心の千兩を。呑込む咽は淀川の。フシ水に育し一德なり。地かゝる所へもいや〳〵。堤づたひに來る人音。見つけられじと半櫃へいやがる辰五郎無理無體。押込〳〵蓋びつしやり。女房鏃路が手を取て。マア〳〵爰へと稻村の影へ押やる間もなく。地家主先に辰巳上り。蹙縣乞共かけ付て。蚤取眼に見付る船。詞コリヤ〳〵新兵衛見付たぞ。緩りとよぶ船に寢て居らるゝなア。胴の間より太い肝。すつぽりと夜拔をして。此家主の安平を。加減よふ一ばいやつたな。コレ皆の衆。尋出して渡すからは。家主が分は立たぞや。ヲヽそふじや〳〵。人の物負ながら埒も明ず宿替。横着者生盜と。地わめくをしづめる女房が。道理々々も聞入ず。詞コレおか樣。猫撫聲の道理轉し。幾節季か聞飽た。そふ〳〵は欺されぬ。コリヤ新兵衛。何ぼ寢たふても横には寢さゝぬ。起おらぬか。地と口々にフシわめき起され。詞アイタ〳〵〳〵。こりや〳〵思ひ入すな。喰ぬぞ。〳〵〳〵。サア其喰ませぬからの此持病。イヤモ何が借た上へは借。〳〵。新しい借錢と古い借錢とが。腹の中でかう〳〵。ひつくり返るによつて。疝癪と成て。アイタ、、、、。地と無病の體弱々と。泣顏するも借錢の。ことはりせめて　フシ哀なり。家主思慮していふ樣は。詞いかに勞。やらぬ新兵衛は無理なれど。又無い物とろといふも無理。所詮さか樣にふるふた迚。鑑ひらなかにもならず者。アノがらくた道具を分散し。借錢の高に應じて。分て取ふじや有まいか。のう皆の衆。ハテせふ事がないざこざ言ふても丸裸。あいつが睾丸をしめ上ても。高が一分にもならぬ物。百貫のかたに編笠なれど。よいはかぶつてやろぞ。サアがらくた道具爰へ　地出せと　フシ皆川岸に立並べば。地新兵衛横手はたと打。ハア、實に尤の御了簡。詞川端の分散とは是がほんの身體の洗濯。地打盤横槌重代の堺庖丁。古ほうぐ書亂したる。落書も。名殘の行燈是や此。七月の十三日は尊靈殿。素麵暖簾八百屋物。地買かゝつては祭れ共十四日の朝の間から。早錢おこせ懸おこせ。〳〵〳〵とわめくは。古かけ鳥籠。やぶれ草履に張かはご。底に殘りし越中褌。涙に絞る紙合羽。片し

昔のさへころ札。懸乞衆も家主も。是で諦めフシ給へかし。詞ソレ／／／渡した。請取た。アヽ待て／／／。まだ半櫃が殘つて有。中は夜着か蒲團か。ぬつくりと臍くり金が有ふも知ぬ。何でもいつち見込な代物。ひかへて置は横着者と。地取にくる腕鄰き退。詞コリヤお家主には似合ませぬコリヤ嘸が物。女房の道具分散に入た例が有か。ヲヲ嘸が物でも誰が物でも。内を見にやり了簡せぬ。ヲヽそうじや／／。鄰き破れこぢ放せと。地一度に寄を張退ぶち退。なぐり立れば目白の押合。手足に取付ぶらさがるを。振放し蹴倒され。組づ轉んづ捻合ふ後ろへ女房が。コレ最ふよいわいのと引留るを。聞ぬ大勢もいや／／。雛路も俱に走り出。皆様こらへて下さりませと。詫る姿にぐんにやりと。見取し家主。俄か細目。詞アヽこれ／／／。アヽ待ていの／／／。ヱヽ三べん言ふたら待ていの。ノウ／／／旁。アレ見給へアノ御姿。存じも寄ぬ所へ天降給ふは天人か。地そも此界の女性ではござるまい。詞シテこなた衆の近付か。アイありやわたしが妹でござりますと。地當座の間に合出ほうだいも何がな黒めるフシ粹と粹。詞ハイわたしは妹。姉聟の難義を見兼。さゝへに出たと申ますも。どうやら女の　地出過な様な事なれど。どうぞ御了簡の付事なら。詞ウヽ皆迄の給ふな。敏から御了簡は此家主が付て罷居やんする。イヤ何姉御や。そうしてありや。未だ定る夫もないか。ハイ。アヽこれ姉様夫は。コレ／／妹何いやる。何事も私次第。／／。ハイ。成程／／。まだ男はござりませぬ。夫故どれぞ相應な。しまつた男の年頃は三十七八で。顔も丸ふい。姿も心も素直そふな。ソシテあの。髭先の長い。家屋敷も持た様な男があるなら。持したうござりますと。地註文合され家主は。首筋元から。フシぞく／／と。詞コレ新兵衛丈。只今アレ妹御の註文の通りの男ぶり。やつがれも又岩木ならねば。互に戀衣の中となる。どうぞ愚妻に下さらば。則ち妹脊の中と成る。さすれば貴丈とやつがれも。則ち一家の中となる。さすれば是迄ずいけんの。家賃はいよ／／さらりと消し。元の通り手前の借家へ。お歸りなされて下さるなら。祝着に存じ奉ると。地早聟顔のフシ鼻の下味ひ。工合に打點頭。詞ソリヤもう思ひ合ふた事なら。進ぜまい物でもないが。眞實な心

底を見ねば相談がならぬ。舅は親。聟は子。是迄の樣に。家主顏に呼付る事ならぬぞ。何が扨〳〵。家根も今迄の樣に。漏次第にして置事ならぬぞや。何が扨〳〵。根太も張替壁の上塗。サアソレ合點か。何が扨〳〵。飯米薪小遣ひも。ヲ、上ます共〳〵。ハアそちの借家へ行てやり賃に月に三十目宛。ヲ、上ます共〳〵。マア夫で大槌内はくろまつたが。今分散して諸道具が一ツもない。外で買ふより此儘で買戻さふ。金はそちから拂ふのじやぞ。ヲ、そふかいの。幸ひ少々持合の銀は當銀。隨分と直ぎつてお買成されませ。サア皆の衆。あの通りじや。銀主は慥。是迄の借錢相應に直を付て買ふてやる。サア振たり。地にふつて涌く。戀のおかげで懸乞共振人は大勢買人は只一人。拍子が直つたへ。詞ヤチヤ〳〵〳〵〳〵。サアしちりんと藥鍋。なんぼ〳〵〳〵。フン貴樣は薪屋殿じやの。ア、そつちの掛は。斯つ百五十目。〳〵〳〵〳〵。家主惚り。コレ〳〵〳〵。いかに面々の金じやないてゝ。餘りむごいと　地天窓かく。孫の手一本手拭掛。詞五十貳匁〳〵。もちつと付て六十匁〳〵。ヨイハ。金壹兩で落しもせい。サア飯櫃の代りになる。蓋なしおかわ何ぼ〳〵〳〵。十五匁〳〵。地いつか遁れん紡車。廻る摺鉢かけ土瓶。口から出次第。拾匁〳〵。三拾目〳〵。一足飛に下駄片足がつくり。跛の綿繰馬。追分繪の十三佛。神の折敷澁團。五月の節句の長刀一振ちぎれたれ共繩簾。破鍋。古傘。鐵漿壺。銀高合せて八百目。さらりしやん〳〵手をうてば。家主は只氣ぬけの如く。途方にフシ暮て居たりしが。詞コリヤ〳〵〳〵。夫は餘まりみす〳〵な。五六百が物はかない古道具を。八百目とは目が飛出る。初手から最一度振直せ。今度は此家主が直を付ると。地いへば新兵衞むつと顏。詞ソレ〳〵最ふぎぢやうを忘れて。此舅を潰すのか。そういふ悋い根性では。女房の面倒よふ見やせまい。聟の相談變がへじやぞ。サアサア妹。船に乘れ。どつこで成と。家も聟もよいのを極てやる計と。地行んとする裙取縋り。詞コレ〳〵〳〵舅殿。暫く待て。暮の鐘。何ぼ成共出す〳〵〳〵〳〵ア出しまする。ヲ、そふ言しやれば。こちもあながち外へ行とふもない。氣心しつた此方の借家へ。サア〳〵〳〵どうぞ戻つて暮の鐘。妹御樣を。彌女房に暮の鐘。ヲ、そりや

呑込だが。跡でいぢむじせぬ樣に。持合せの銀成と。内入にやつてしまはしやれ。ハテめつそうな。道具代は節季算用。先じや〳〵と。地いふても言せぬ。懸乞共。詞イヤ〳〵〳〵家主でも懸ては賣ぬ。其銀おこせと　地せり合間に。新兵衛夫婦もやい綱。手早に解て飛乘〳〵。フシ船を深みへ漕出す。地家主見るより仰天し。詞コリヤ。ヤイ〳〵ヤイ。おれも一所に乘てくれやい。〳〵〳〵。ヱヽむごい。鬼よ蛇よ。家主一人乘た迚。輕い船が重らふか。借錢こはれて居るを見る目はないか。聞耳は持ぬか。地乘てたべのふ乘居れと。いふより外は涙にて。船よりは知ぬ顔。陸よりは手を上て。待てくれ〳〵と。呼はる聲も出船に。堤の高みに驅上り。翹てゝ打招き。家主の身なれば。壹匁や二匁の銀惜いとは思はねど。八百目九百目が。濟しも戻しも叶はふかと。濱の眞砂に伏轉べど。哀を知ぬ懸乞共。惣々かゝり押へ取。紙入たくられハアはつと正氣失ひかつぱと伏す。詞ヤア〳〵〳〵。コリヤ眩暈たは。捨て逝だら後日の難義。地コリヤどふせうと立騷げば。米や薪屋油屋も囃き合。家主が耳に口寄。大音上。詞ヤア進疾家主。銀かやそ。〳〵〳〵と　地いふ聲に。むつくと起てぎろ〳〵目。詞ヲヽ氣が付たら戻さぬと。地紙入隱せばがつくりと。腑ぬけてばつたり倒るゝを。米屋透さず聲はり上。詞ヤアしはん坊の柿の實。かやそ〳〵と　地呼はれば。又むつくと起。詞ヤア進疾やつら。金かへさぬか。早戻せと。地聲を力に五足六足。轉べば呼はり呼はれば又むつくと起。よろぼふ道も見へわかぬ。戀路の闇を掛乞に。ひかれてこそは　三重へ歸りけり。

## 第八

地そも昔。フシ夏の襠苦にならず今は汗じむ帷子の辻が。花より紅葉より。いとし小枝を生立る。水は自由な。川筋の。住家は木幡山崎や。家渡り粥も何度やら。しれぬ暮しも浮世なり。地淀屋の水は呑ながら底意は泥の清九郎。慥爰らと押推に。覗いて笑壺に入口から。詞お内儀御亭主はお留守か。アイまだ歸られませぬがどなたじやいな

ア。イヤどなたとは餘所々々しいと。地ずつと這入つて太夫殿。詞淀屋の清九郎見忘れてか。扨未だに美しいの。我等も首だけ上つては居れど。親方持の身分で。茨木屋の道芝太夫買事さへ世間の聞へ。同じ事で傍輩の新兵衛は器量者。委細構はず請出した。夫で足は上つたれど。こんなよい女房をしめて居るは。エ、羨しいと言ふか。したがこな樣はひよんな男にかゝつて。薄い世帶をなさるゝの。向ふた佛に手合せじや。淀屋の番頭清九郎。アノごくどうな男を捨て。へ、、、、乘かへる氣はないかどうじや〳〵とフシしなだるゝ。詞何いふて下さんすやら貧苦は時節。金より何より大切な。此子寶を育てるはいな。扨は子迄へり出したか。夫では爾〳〵しまねばならぬ。サア其しむ中に。地色も香も昔の燒物挽殼で。樂しむ心が。詞伽羅じやはいな。ム、伽羅にも有かとけつかるの。エ、いまいましい中じやな。そんならふつゝり思ひ切つて。其かはりに金戻して貰ひたい。ハテ六年以前おれが自身に持て來た廿兩。アノそりや淀屋の旦那から。サ、、、、まあ聞たがよい。爰の新兵衛が仕くじつた後。旦那古庵樣がおれを呼で。ちいさいから馴染だ奴。不便なれど隙やらねば此家の掟が立ぬ。此金二十兩是もおれが遣るといふては表が濟ぬ。そちが借分にしてやつてくれと。おれに持しておこされた。女夫が有がたいと。涙こぼして戴いた事忘りやせまいがな。其時に旦那へ見せる念の爲。新兵衛から取て置た金證文。貸主の名當は此清九郎。實は旦那から出たのなれど。證文の表はおれが貸たの。そこが相談。貴樣がおれに情をかければ。此證文反古にする。あしらい方がむごければ證文取立る。金を取るか。貴樣を取るか是非一方は取思案。サコレ貴樣も早ふ御思案なされと。地病ひつかした其跡で。フシ可愛がられる下心。詞アノじやら〳〵と何言じやと。地紛らかしても心障り。胸の晦日眞黑に。門からおこつて來る家主。詞新兵衛女夫の盜人め。四も八も喰ぬおれをよふやつたな。けたいが惡いぞ〳〵。是は又何をきよと〳〵しう。やつた〳〵とおつしやるが。今日は晦日なれどまだ家賃は。エ、そこ所か。家賃はいつの昔。コレ夫もおれが了簡で此間の美しいやつを吾儕の妹じやといふたによつて。借錢も請込でやつた。今新町の廓から。コレ此人が來て

聞ば。雛路といふ太夫じやげな。欠落したを引込で。事も廣大な。千兩とやらの金の尻を。おれに浴せる工ぢやな。コレ其おやまめは此内に隱して有。引出して連て往なしやれ。ヲ、そふせうとどや〳〵と内に入。詞ア、申〳〵。そんな覺へはござんせぬぞ。殊に今夜は主も留守歸らるゝ迄。ヲ、置きや〳〵。其新兵衞のだんす者。マア第一が大のら。相應に書手も持て。寺子取りや内があつかましい。扇の繪もめんどくさいと。何にもせずにごくにも立ぬ。折句や笠附に顔しはめ。其間には碁將棊の會屋へ這入り。此間はよい能が出來て。熊八が盆でちよぼはりに行げな。己をやりくさつた替りに。家賃も借錢もでんどへ引ずつて行て取こくるのぢやぞ〳〵。ヲ、取こくつて見せるのじやぞ。ヲ、そうじや〳〵〳〵。牽公人渡さねば家搜して連ていぬと。地腕まくりして立上る。首筋摑んで。詞投たはどいつ。ヤア新兵衞か。牽公人を引込で。其上に投てよいか。サアよいてや。聞て居る。いかにも雛路は爰に居る。欠落者とは何の事。おれが客で揚て置たが何とすりや。ム、面白い。揚たのなら揚代貰を。ハテやかましい。廓を出てから卅日に足る日たらず。三十兩か五十兩の目くさり銀。あすの朝取にこいと。地手厚ふ出るに氣を呑れ。顔を眺めて。フシ押だまる。詞新兵衞そちらのせりふが濟だら。此清九郎が廿兩の金覺えが有ふ。六年の利足かけて四十兩餘り。淀屋の重寶似せ物の鷄の繪を。お上へ上た咎めで淀屋の家は潰れる。詮議の有辰五郎殿は欠落。是もおふかた此あたりにまひ付て居られふ。夫は儘よ。おれも浪人で術ない。貸た金返して貰をかい。ム、古傍輩の清九郎奥聞より口聞と。主の家の騷動はかまはず。我身のかくまひ計する性根の知たお手代。古庵樣から下された廿兩。みすみす知れて有る金なれど欲かやらふが。今はない。こつゝり當たらすつぱり返す。戻さぬ内はおれが金。女郎も揚の中はおれが物。此家も借て居る中はおれが家。家主でもどいつても。奥へ脇切込だら命と釣替へ。ドレ一寢入行て寢やうと。地弱み喰ぬはすいほうの肝で。フシやり付奥へ行。詞がおれ。家主もあゝ居られては身上仕廻。何じや有とあすの朝迄金立にや。代官所へ連て行。お内儀詞つがふたと地口々わめいて行懸の。悪口噂も女房の肝にこたへて兎や角と。

フシ思案にくれて居たりける。詞ア、金銀の澤山なよい男持てお仕合せじや。ドレ我等も明日お上へ訴へ此證文で物申さふと。地立を引とめ。詞清九郎様。わしやお前に願ひが有。何でゐすの。サイナお前のさつきにおしやんした事。わしさへアイならお前はアイかへ。ハテおりや敏乍アイじやけれど。貴様の眞實の所がどうも知ぬ。サアわしが眞實は。アノお前の女房に成たい心。そりやほんか。アイ。地何の啌ならこんな事。女子の口から言れうか。疑ひ深いと。もたせぶり。詞エヽ有難い其御意を待て居たわいの。イヤ待暫し。門徒の佛壇結構過てめつたに乘ぬ。尊い穴をちよつと見せて。身上有限落し穴へすくひ取んとの御誓願穴かしこ〳〵。それ共實なら去狀見たい。サア其去狀の取様は。コレナ　地斯々じやはいなと。囁けば。詞ム、何といふ。新兵衞と手の切様がないに依て。指當る金の才覺に。身賣するといふて拔て來るか。こいつはゐいは。サア迎ひの竹輿に添て。五十兩の金が來ると。其金で新兵衞殿の顏を立るが緣切代。出來た。スリヤ其竹輿に乘て。直に手前へお出るじやな。必ず違へまいぞやお前も今のを合點じや〳〵〳〵。女夫の中に啌ついて堪る物か。手附にちよつと口中計。ア、コレ今のが濟ぬ中人が見ては。ヲツト誤り。夜の明る時が女夫の堅め。地早う烏が啼てくれ。嗚後にやと出て行。闇の礫も色に打。金で貞女の破れ窓。引立。てこそ入にける。地夜さへ短き緣なれや。結べば消る夏の露。障子をそつとしめあけに。地雛路は一人物案じ。もしやそふか。但し斯かと心の迷ひ。思ひあたりに有合世帶。破れ行燈にかんてらは。賣殘りたる昔蒔繪の硯箱。延紙の幾重に。散し書。筆休みなきそれしや流。見るも媚く。フシしなつき文章。地重ねた形の折封じ。折返さぬは女子の智惠。新様參るを後より。詞雛路様。ソリヤ何さんす。エヽと飛退。アノおもよ様の。人に惚りさしてじやと。地くろめ兼たる懷に。フシ勤氣波打計なり。詞イヤそつちの惚りより。わしも大抵惚りした事じやない。ドレこなさんの胸の糯。おさへてやろと手を指込。引出す文の破れ口。今更何と言譯も證據取れて指俯く。胸づくし取て引すへ。詞ほんに〳〵餘りで物が言れぬ。わしが廓を出てから後。問音信もせぬが先と。きのふ今日來て馴染過。こちの

人にもふ色事じやの。いとしぼそふに辰五郎様を。つまみたい程つまんで。勘當の身に成なされたらうるさう成て。又新らしう新様。しんぞ神かけて何じや。お前の男氣に誓文なづみり。全盛にお成なさるれば。其様にあつかましう成物かいな。ヲ、結構な太夫様。徒女郎人でなし。わしを去れと書くさつた。恩しらずめとさん〳〵に。喰裂引裂狀打付。粹も恪氣はつき詰し腹立顔をじつと見て。詞道芝様。徒咎めするお前が。新兵衛様に隙取て。清九郎と女夫にならふと言しやんしたは。ありや徒ではないかへ。ヤア何と。サアよもや本氣じやござんすまい。よし偽りでも今の事。若も世間の沙汰になる。其時の男の心。お前の今の腹立に。思ひくらべて見やしやんせ。命づくにも成は色。なま推參な異見立と。悪ふ聞てフシ下さんすな。地わしやほん〳〵に眞實の。姉様の様に思ふから。大切さが餘つていふぞへ。禿立から遣はれて。襠の着やう迄。詞教へて貰ふた其御恩。何の忘りやう。常々お前の教訓に。コレ松野よふ聞ておきや。同じ勤といひながら。太夫は身持が猶大事。座敷の行儀寢る時は。寢姿といふ苦勞有。假にもお客につん〳〵な床あしらひは嗜み事。すかぬ朝込呼立に。抱しめるのも別れの秘事。身仕廻ひ所の仇口にも。客の名立ず眞實の。色事は只端手にせず。常から船に呑込せ。音なし川の一筋に。洗れの身程貞節を。立通さねば恥かしい。ぬめた女郎と後々迄廓の名ばし立ちやんなやと。くれ〳〵との御異見は。勤の身の女大學。お經文より尊ふて。わしや片時も忘りやせぬ。いふたお前はいつの間に忘れてかいな道芝さん。但しは深い入譯が。有ての事なら打明て。おつしやりませと姉女郎立て身身のフシ兄弟勝り。地異見も道は道芝が。早まり過た負をしみ。詞ムヽめんめの事を言れまいと。人にかして立名がましう。そふ言れて隱しはせぬ。いかにもわしや徒して居る。ヲヽ金輪際して見せふ。いらざるお世話やかんすなと。地意地をつゝばる肝癪虫。押の强さに興さめて。詞テモさつぱりしたおつしやりかた。最う何にも申ませぬ。左様なら私も新兵衛様と色事致しませうはいな。ハテ變つた事の。わしが徒すりやこな様もせにやならぬか。アイこりやお前に密夫の付合じやはいな。かた身恨みがなふていつそお前もよ

かろがな。能と惡くと構ふておくれな。人の男と精出して樂しみくされ。それもお前が構ふておくれな。どれ新樣と行て寢やうと。地ぐはたびしあたる煙草盆。すれた女郎のすれ〳〵は銀の烟皿筒の張强ふ ヲシ折端納戸へ立て行。地すげなふ言ては見た物の。あの子がいふは尤づくめ。詞道ならぬ脇道も。今夜中になければならぬ。金の替りに清九郎が。女房にならふといふ事が。生て居る氣で言れふか。地迎ひの竹輿の其中で。自害する氣を新兵衞樣に。知して死たい知したら。よもや得心さしやんすまい。死だ跡迄徒者。畜生と思はんせふ。此言譯は何時せふぞ。わしや迷ひに成はいなと聲を忍びて。泣居しが。取分て氣にかゝるは。詞アノちひさい新之助。殊に虫深い生れ付。母が居てさへ手にかゝるに。地あの子抱へて鰥暮し。嘸や苦勞をさしやんせふ。詞可愛子を捨死るといふ。こんな惡い思案より。どふぞまちつとよい思案はない事か。といふて今夜中に銀が出來ねば。ハア何とせふ〳〵。地どふせふ夏の。夜を告る。夜番太鼓の一イ二フ三イ。四ツも五ツも打過て。詞いつの間にやち最ふ八ツ。エヽ今夜に限つて夜の短さは。あた忙しないどん〳〵と。どんな　地太鼓の打やうと。科ない夜番讖る共。しらず嘘。時行風。引たそふなと打て行。詞ホンニそふじや死いでもだんない。銀の出來る事が有。あしたは神明さんの富。先度一枚入て置た。是が當つたら明日の朝百兩くる。ソレ〳〵。何の別に。もう騷がずと落付て居やう。ア是も思へば知ぬ事。借て置た物ではなし。そんな事當にしたら。三五十　地八二八の。饂飩蕎麥切の。フシ聲も嵐にばつたりの。枕屏風に目覺す子。詞ヲヽ可愛や〳〵。夢見やつたか。つゝともふ。アノ饂飩屋が來ると。めんよふ此子が夜泣する。もう目を覺さずと本間に寢や。ねん〳〵ころろん〳〵や。ねん〳〵ころゝん〳〵や。地ねんねが守は何所へ往た。あすは尋て泣て有。詞とゝ樣が尋ねさんしたら。嘸は死出の山を越て里へ往た。いた〳〵しやいぢらしと。たゝき付ても寢苦しき。破竹の音更行空。詞夫よ最前清九郎が。辰五郎樣のござる所知た口ぶり。アヽ氣づかひなちよつとお知せ申たい。イヤ〳〵〳〵。こちらの手筈は違へられぬ。最うたつた一時餘り。そふじや。どふでも　地そうせにやならぬ物。未練

と心取直し。思ひ切ては男氣に。負ぬ命の離れ際。剃刀 フシ取に奥へ行。犬も寢かへる時分を考へ。人の肪を念懸る。頬も鼠の夜ばたらき。物ほし月夜裏傳ひ。暗い世渡りうそ〳〵と。隣の屋根から這て入。蔦の細道贈太に。窺ひ窺ふ拔足さし足。何でもしめた靑細引の古葛籠。内に金氣はなさそふな。鍋釜はづして奥の間にあはや人音。逃端もなむさんぼんの窪からぐす〳〵と。 フシ下屋へ蟹の横這入。 地直に生れた新兵衞が男の魂覺への一腰。提出るさし足も。安床疊のぎしつきは。下へびく〳〵見付たかと。命の瀨戸際思案の鍔際。あたりに人は白刄の鋒。常には拔ぬ町人の指詰つたる身の鉆を。今本心の砥にかけて。磨く寢刄の。音凄く。我を切かと盗人が。疵持足から胴震ひ。 地ひいや冷汗かくぞとは。知ぬ主が一人言。 詞親且那樣。御赦されて下さりませ。大事の奉公を色故に仕損ひ。せめて若且那のお爲にと。思ふに任せぬ此貧乏。二萬兩三萬兩も取なやんだ裏打て。三百目の才角。ならぬ所を付込で。女房に不義しかける。清九郎めが悪根性且那殿の家絶すも。皆清九郎めがなす業。思へば憎くい盗人め。うぬ胴腹を一ゑぐりと。思ひ詰ては見たれ共。町人の情なさ。人一人切殺せば。法を破る科人。切込か獄門に肆されるのを。大坂の母者人が聞れたら。 地人中へ顔も出されまいと。 詞一夜さ寢れば殺す氣も。弱りの付が町人と侍の段違ひ。女房が徒は。やつぱり己への深切と。言ねど察して フシ過分ながら。 地淀屋の家お咎めの。元は寶の金の鷄。 詞似せ物か正眞を。見覺て居る新兵衞が。お家に有合さぬ計で。お主の御流浪。親共から二代の奉公。廿年の年を勤め。今別家にでも成て居たら。 地適忠義の立所。 地思へばお家を潰したも。科人は此新兵衞。 詞女房の影で漸々と。少しの忠義を立て貰ふ。ふがいない此體。のめ〳〵と古庵樣へ。此頬が合されふか。 地元服の時下された。此脇指で腹切が。親且那への申譯。坊主めが事頼むぞと。心で言て口の内。 フシ誰に聞する暇乞聞人は下屋の盗人ひとり。始めの震ひ案の外。鬼神に横道投首し。笑止がるこそ フシ殊勝なれ。 詞不便や坊主めが餘念なふ寢おつた顔はい。身腹なさぬ捨い子でも。とゝかゝいふからちつとの間も。別れて居れば案じる物。是が一生の別れかと。 地思へば咽へつゝかけ

る。おく歯に涙噛砕く。胸は八ツ裂七ツの鐘。氣後れしては。仕損ぜんときつと覺悟の押肌ぬき。地尋常に座をしめて。詞勃女房未來で逢ふ。南無といふ聲かけ上り。腕首しっかと止める盗人。詞待つた〳〵〳〵。ヤア放せ〳〵。イヤ〳〵〳〵。放さぬ〳〵。コレ〳〵内の衆。寢て居る所か。皆起さつしやれ〳〵と。地呼はる聲に驚く雛路。おもよも周章走り出。詞ヤア死ふとは曲がない。女房が憎さのつら當か。地お前への言譯に。死るのはわしが覺悟。詞イエ夫も根は私から。愛相づかしも有やうは。地先へ死氣で剃刀の。裏へ廻つた恥しい。詞お前が死で辰様の世話は誰がする。ヲ、何ぼでも殺さぬ〳〵。ほんにマア危い所をお前様。ようマアとめて下さんしたと。地いへば新兵衛はらはら涙。詞何も角もよふ合點して。思案を極めに此切腹。女房とめな。何かは二段。存じ寄ぬお世話に預る其元様。終に見知ぬお人じやが。地どなたでござると尋られ。恟り天窓かく行燈。かき立る火にきよろ付顔。詞カ、。あなた近付か。イ、エ。ついど私も知ぬ御方。ハテめんような。そしてマア表はとつくり締て有に。何所から内へ這入しやつた。サア夫は。慥何處からやら這入たが。最一度這入直して見よふと。地迚んとするを。詞コレ〳〵。合點の行ぬ。見れば鍋釜迄もぬいて有は。ヤア、。貴様こりや家尻切じやの。ハイ御推量の通り。くぼい商賣を致します。地扨こそと新兵衛。吃相かはれば。詞ハイ御赦されませ。〳〵と　地俄にしよげる。膝頭板の間に。ひざまづき。詞斯見付られましたからは。最う迚も走も致しませぬ。お恥しいこつちやが。地物體腹からの盗人は獨もござりませぬ。親の仕似せた商ひはいや。のらがかふじてこけ博痴。けたいがかふじてついちよつと。履物からいがめかけ。じんどうばらす様に成ても。悪い事じやと平生から。得心して居る底心に。生ぜかしちつと計の正直が害。最前からのお悔。義理に詰つて死しやる。身につまされて尤と感じ入た狼狽者。盗人商賣ころりと忘れ。我でに見付られに出たは。親の罰。天道様の罰。今といふ今とつくりと思ひ知ました。是迄の命。縄かけてなとどふなと成ません。人間でもない私が。慮外な申分ながら。死ふとはちと御思案違ひ。こんな非道な世渡するも。一日でも生て居たさ。命

ほど大切な物はございませぬ。女房密夫しられた迚。一分の捨る事もなし。お内儀様も金故の事なら。曾不義徒しても。死には及ばぬ事。殊にちらりと聞ますれば。おちひさいのは蓑ひ子とやら。二人が二人で死しやましたら。可愛そふに其お子は渦へ死。二人と思へば三人の命。五十年づゝにしても三五百五十年。一時に帳消すとは大所のお手代様。算盤の桁が違ひました。限りの來た私が體。此首一ツで命の扱ひ。入ぬ左平次と思召さふが。盗人が末期の御異見。どふした緣やら始めて來て。ほんに眞實一家の様に。思ひますと。地一生いがみが泣ぬ目に。鍋錢程なあら涙。かますのフシ袖を絞りける。地新兵衞手を打。そふじや。詞誤つた〳〵。お主へ不忠の言譯に。切た腹が三味線の皮にもならず。猫に劣つたむだ死。命さへ生て居たら。年々に主人の御恩。送り返す期も有ふ。御異見きつと聞屆けた。もふ死ぬ。かゝも死るな。勿論雛路殿は猶殺されぬ。三人の爲には命の親の押入殿。地泥の中から玉とやら業に似合ぬ恥しい一言。繩かけるなどゝは勿體ない。お禮申すと手をつけば。詞そんなら助けて下さりますか。ヲゝあのおつしやる事わいな。助けたといふはお前の事。結構な御異見で。主の心が和らいだ。佛の様な地お方じやと。雛路も俱にフシ伏拜めば。詞是は術ない。此商賣せぬ先から。一家一門方々を拜んでは廻つたれど。拜まれるは今が始め。地今夜はどふやら出つらが悪い。休みにして歸りましよ。是も他生の緣の下。葛籠引出し。詞へゝゝゝ最前はお斷なしに此葛籠を。爰迄持ては出ましたれど。蓋したなりで中の物。一色もちゝうはござりませぬ。地改めて請取しやつて。詞アゝ何のいな。正直なお前に地何の麁相が有ぞいな。詞ソレ〳〵いやもふ盗人殿。是から互に念頃にしませふ。時分で有ふに何にもなくと。嘸茶漬しんぜいやい。ホンニ氣が付なんだ。地ドレ焚付ふと釜の下。詞イヤ鍋は爰におはします。是もお返し申します。お心ざしは地喰たも同前。フシもうお暇と立出る。詞アゝ是なあ。此更て有のにたつた一人不用心な。挑燈上ふか。いつそ夜が明てから逝しやんせ。ハテ扨素人衆といふ物は。暗い中がこちらが世界。夜が明てたまる物か。そんなら最ふござんすか。又あすの晩お出へ。ハイ〳〵。よふ締て御寢なりま

せと。地互におれそれ挨拶はしらに成たる夜明前。東の辻へ別れ行。地新兵衛も跡見送り。取片付る古葛籠。詞ハテ不思議な。此葛籠はよふ見れば。こちのとは違ふて有。ホンニこりや此方のではござんせぬ。そして上に何やら書て張てある。地といふに氣の付く書付は。進上淀屋新兵衛殿へ。盗人より。地と讀でも讀ずとけ兼る。細引はづし盗打明れば中からぐはらり。包切たる裸小判。數はよまねど貳百兩。まだ外に掛地一幅。子細有らんと目を配れば。葛籠の裏に印せし手跡。詞何々我等事進藤源四郎と申す伯州浪人。流浪の砌粮に盡。一子を捨候所。其元方に御拾ひ成れ候事。承はつて悦び入候。然る所計らず淀屋の内へ入込。清九郎に賴まれ。似せ侍に成し上。其元の妹お次殿の手に入し此一軸と。金子を奪ひ取。跡にて聞ば貴公の妹。恩ある人に仇をなせし。先非を悔みて今宵返し進じ候。此掛地こそ正眞の金の鷄。ヤア〳〵　地扨はと一軸を。開けば實も疑ひなき淀屋の重寶。詞スリヤ此子を捨た親。情の禮に渡しに來たか。そんなら今のが淀屋で逢た。源四郎樣で有たかい。雛路殿女房。今といふ今新兵衛が。誠の忠義も辰五郎樣。コリヤお家が立ぞ悦べと。地押戴き〳〵。フシ悦び合たる折こそ有。地思ひも寄ぬ後に清九郎。詞盗人めが切明た。裏壁かへしに疾ふから來て。殘らず聞た大事の掛地。こつちへおこせと立かゝる。ヤアよい所へ清九郎。此掛地の似せ筆も齊がこしらへ。御主人の家を絶す人非人。代官所へ引て行。覺悟ひろげと　地言せも立ず。だんびら　フシひらりと拔合せ。地あしらふ中に明方の。時刻にあふて朔日鷄。東天紅と一聲は。詞ヤア繪圖の奇妙を顯はしたは。彌違はぬ誠の正筆。どつこい　地夫はと又切込。双音羽たゝき一時に。一鷄啼ば近所の屋根鷄の聲々明渡る。地天罰白双脇腹へ。思はぬ深手にうんと計。乘かゝつて南無三寶。憎さも憎しと深入せしと。思案の門口以前の盗人。詞構はずと留め〳〵。ソレ其葛籠に死骸を打込。直に我等が今夜の働き。切人は源四郎。何も角も　地身にせたら負ふ盗人の。義理は忘れぬ親と親。互の胸の夜は明てやがて出世の瀧登り。淀屋の跡は八幡山。金の鷄の一聲を。代々に傳へて　三重、いちじるし

# 第九

詞サア〳〵旦那殿爰が約束のお屋敷。ヤレ〳〵立場なしの一肩とはゑらい仕業。一杯呑してやらしやませと。地口々わめく蜘蛛助共。聲もかなぎる金澤の。フシ龜が谷の上屋敷。地裏門口より立出る父里の兵治。詞ム、其長持は大坂淀屋の道具成か。成程〳〵左樣でござる。則長持二十棹。御受取下さるべしと。地目錄渡し長持の。蓋押明恭々敷取出し。詞是が先珊瑚の御簾。びよふ宮の棟瓦三十八枚。ム、成程。シテ其掛物は。ハツア是は僖宗皇帝のしらふの鷹。成程是も晉に聞へし名物。地扨其次は定家卿。小倉色紙と人も知。數も三枚千枚分銅。重きはずつしり黃金佛。同く藥鑵茶入類。數も限らぬ金銀細工。雀の置物十六羽。飛切大撰の朝鮮人參五十斤。其外名畫名筆の。かけ物凡三百幅。何れも折紙フシ究め有。詞我等も不思議な合點の行ぬは。コレ此金の竹ながし。澤山そふに三十八本。地是はゐんすの風車。廻るもせんまいからくりか。イヤ水銀壹萬五千斤。先是迄がフシ先荷の分。地聞覺たる口上に。父里の兵治一々改め引合せ。詞書付の表相違なし。今日急入用の荷物。殿にも甚お待兼。直にお庭へ舁入よと。地下知の中より窺ひ聞。飯田左近歩み寄。詞コレ〳〵兵治。荷物門内へ通すに及ばず。諸色不殘大路にて燒捨させよと。地聞て惋り。詞イヤ是は餘り珍敷器物故。今日大將お成の御馳走。御上覽に備へる爲主人彈正取寄ました。ヲ、夫故に差留る。都て貴人を饗應には。書院廻り手道具迄。一色も古きを用ひず。萬事其時に至つて改め拵ゆるを古實とす。況や賤しき町人の。一旦手に觸たる器物。武將の饗應に用ひん事恐れ有り穢はし。左程の事に心付ぬ彈正殿ではよも有まじ。天が下の御主。假にも町人の有樣をまなび給ふは不吉の第一。目通りで灰燼となし。禍の根を斷は執事の役目。金澤殿への言譯は此飯田左近が胸に有。地早燒捨よと尖き詞。父の氣をつぐ發明に。一言返すフシ詞なく。地折角大汗かいて來た。甲斐も長持棒にふる。蜘蛛のふるまい酒手乞。張合なげ首表門。お成の聲も遠侍。皆々御

門へ　三重へ入にける。地お成儲の新御殿。花躑躅を造る三ツ間四ツ間。いつも御機嫌義詮公色と酒とに亂れ髪。捌け過たる御盡し。善盡し美盡せし遊君舞子奥女中。色を諍ふ其風情。四季の草花を一時に フシ咲せ眺る心地せり。詞サテサテいつ迚も彈正が馳走は。我心に滿足せりと。地請持給ふ盃も。數を重ぬる御慰め御饗應の大小名。立替り入替り。お髭のちりつるてん〳〵と。フシ三味や太鼓の大騷ぎ。地居相撲首引枕引。棒捻は熊の井三郎月の輪八郎。素袍の袖を捲り手に。筋骨立て力瘤。吹出す汗は瀧津浪岩を穿つが如くにて。ゑい〳〵うんと捻廻し。力身返つて眞倒。緣より下へ月の輪は。土に熟込しかみ顔。一度にどつと手を叩き。イヤ〳〵〳〵落さつしやいても フシ勝じやとざゞめきける。地大將甚御稱美有。詞出かした〳〵褒美をくれよ。地ハツト答へて御祐筆世雲角内。仰せ書さらさらと書認め。詞只今の棒捻。力餘つて庭上へ落たる月の輪十分の勝たり。褒美として皆朱の棒百本。狸の生皮百枚。下し置るゝとの御墨付と。地渡せばハアはつとひれ伏て。砂にまぶれし面目を。フシ引起してぞ次へ立。地絹の香を。フシ先晉なひて立出る。金澤が妻糸萩迚。地まだ若草の露深く寢よげに見ゆる品形御前間近く手をつかへ。詞誠に今日は有難きお成。何を斯との風情なき饗應。御不興も下されず御機嫌よひを拜し。地ほんにやま〳〵お嬉しやと。愛敬あひそひんまろめ。世界の戀を磨き込顔に靨の フシたまり水。地首だけ游ぐ義詮公。詞テモ見事。見る度々に。色も思ひもますけれど。金澤が秘藏の花を。手折られもせず。せめて庭前の花なりと。そ樣の御手づから所望せん。地それをそもじと眺める心。早ふ〳〵。ハツト諾へてしとやかに。立寄花もけをされし姿。振よき枝に手をかゝる指先爪紅に。色を添けん紅梅を フシ一枝手折差出す。地花諸共に手を取て。どうもならぬと引寄られ。背ける顔に紅梅の放してたべと氣をあせり。心奥より窺ふ彈正。何か工夫に フシ指籠る。地襖を明て八ツ若が。餘念ない綱肩にかけ。にこ〳〵 フシいそ〳〵歩み出。詞申お嶋樣。お爺樣のおつしやるにはお慰に此綱を引せいとの事。サア皆こいよ。アイと地一度に立かゝり。よい〳〵よいやな。四ツの綱ぐらそれやれよいやな。わさりとたぐりかけ何といふてしめ

かけ。ヤレ中綱から聞かけろ。あい間にはどつといふてたまる物じやないよへ。若も山の木の天から山の若い衆。落たら喧嘩にならなひか。よい〳〵よいやな。よいさてんよへ。ゑいよへ。よい〳〵よいやさ。地ゑい〳〵〳〵〳〵引綱の。末は白木の　フシ箱の中。地端手風流の舞子共。かざす扇子のしほらしく。歌わしとお前はナ。いつの檜扇あひ初て。眞實にかはる舞扇。さす手引手にしめつゆるめつ。ソンレハほんにへ。ゆるがぬ要未廣ふ。樂しむあふぎ。扇じやへ。〳〵。手を盡したる俳優雜伎。　フシ興を催す計なり。地ヨイヤ〳〵とどよみを　フシ造り譽る聲。地取次役龍出。詞只今飯田左近殿。君の御機嫌窺ひの爲參公に候と。地申内より飯田左近。上下立派さはやかに。威有てたけは年よりも悠々　フシとして入來り。地遙こなたに平伏し。詞我君是へお成と承はり。及ばずながら御取持。不調法の此趣向。御台覽に備へ奉ると。地怪しの賤が手業なる。草刈籠に鎌取添。御傍近く　フシさし寄る。地つく〳〵御覽じ。イカニ左近。詞其方が親多門我心に違ひし故。出勤をさし留置たれば。そち迚も慎むべき所。押て參るのみならず。心得がたき此品。子細いかにと有ければ。ハア、さん候仰の如く。父多門御前を遠ざかり候故。御傍には佞人讒者時を得て。猶々君の心を還す。去に寄て御身持日を迫て宜しからず。是を諫る者あれば取て押籠。或は又改易仰付らるに寄。御譜代の者迄も君を恨み奉る。さすれば是亂の基。早く御心を改め給はずは。地さしもに堅き足利の名城も。終にあれ野とならんは必定。其時刈ん草刈鎌。君の好み給ふ物故。詞差上て候と。地憚る方も。並居る人々舌を。フシ卷てぞ恐れ入。地忠言耳に逆立大將。詞ヤア慮外なる小躰め。見るも中々いまはしゝ。そこ立去れと。地有合ふ梅の枝追取て打給へど。動かず猶もすり寄て。詞ヤア御聞入なき中は。打たるゝは愚。一命を召るゝ共此座は去ぬ。コレ御覽遊ばせ此花の。色香にめでて木の下に寄時は。地蛾蝶といへる虫有て。人を螫なやます。眞其如く。女に心奪はれ給はゞ。彼の虫ごとき怨敵有て。終には御身を差つらぬかん。地恐ろしや淺間しや。御卒御心を　フシ飜され。末の世迄も名將と。御名を殘し給へやと。辯舌淀まず飯田が諫め。實に執權の　フシ子息なり。詞ヤア重ね〳〵の緩怠奴。つ劔

の鉛となしくれんと。地御佩刀に手をかけ給へば。彈正かけ出御手に縋り。詞ハア、暫く〳〵。御高免願ひ奉る。尤御遊興を妨げしは。不屈きとは申ながら忠義を存じ過しての不調法。何卒拙者へ御預け下さるべし。ナニそれ女共。奥の間へ御座を遷せよ。早く〳〵。地いざ先御入下されかしと。申上れば實も〳〵。あつたら座席も醒果たり。いざ改めて酒宴の催し。そやつを手討なすべきぞ。早く白洲へ引立よ。皆々來れと引連て奥の間深く入給ふ。御後ろ影ほいなげに。見やる左近を金澤が。隔つる襖諸共に引立てこそ　三蔓入相の兼て窺ひ菊の間の。明り吹消し　姚千枝。探り足して忍び出る。人目に繼と見上る亭。登る痞へを　フシ押明る。地障子へばらり知せの小石。心得軒の立どゆ取。塀の外面へ囁き竹。探り寄たる黒裝束闇はあやなし錦の守り。上より入る逆落し。下には取てとつくと聞。詞扨こそ〳〵。心得がたき彈正が。素性は躬が此守に。委く有とな出かしたと。地いふも心の内と外やつゝ返しつゝシ囁き合。詞後へ久留山典膳が。千枝が襟かみ引つかめば。懷劍ひらり振返り。突かくる腕くつと捻上。地ム、繼路か但し内通か。塀の外面に樣子ぞ有ん。地おびき入んと樋竹たゝき。吹込囁くたばかりごと。聞取下にはにつこと笑ひ。五音陽聲女に有らず。扨は見咎められしよな。生置れずと袖鐵炮。筒口とゆに差込で。引金どふと耳打拔れ。くる〳〵苦しむ久留山を。千枝透さず懷劍にて胸先ぐつと差切障子。外にも人や見咎めんと。飛が如くに　三蔓へかけり行。

## 第十

地勞有て功なきは水に繪畫る世の譬へ。忠言空しき飯田左近。君の怒りのたゞならす御放し討有べしと。庭上に土壇を繁。緣側には女房達。若手向ひや有んかと。心赦さぬ腰刀。遉はフシ武家の育なり。地初更を告る漏刻の。やゝ時移り義詮公。沈醉の御目ざめ。詞ヤレそち達よ。暫くまどろむ其内も。何故酒宴を怠るぞ。イザそち達も一献汲べし。

さかなくれんず。刀。刀と御錠有る。地はつと媚く刀番捧る。序王のフシ御佩刀。地追取御座を立せ給ひ。詞ヤア誰か有。左近めを引立こよ。早く〳〵の御聲に。地引れ出るや兒櫻。枝振袖の影うつす。花の鏡の水の泡はかなく。消ん今の身は。深山。櫻のすがりして。嵐を待ぬ命ぞと霑れ白洲に畏る。地大將庭におり立給ひ。詞おのれ誠に忠義を思はゞ。善惡俱に我心に順ふべきを。諫言などとは小ざかしゝ。數足らざる舌に掛け。主を蔑せし其報い。只今三世の緣共に。只一刀に切捨んと。地玉散る刄も鋭き御氣色。振上給へば。振仰向。面體御らんじ。詞ヤアそちや彈正が妻糸萩。こりやどうじや。こは如何にと。地御不審忽ぐんにやりと。打てかはりし御目元。女中一度に詞を揃へ。詞主人彈正申上るは。御預の此左近。差出し候上は。御手討なりと又はお手生なりと。即死骸は還御の砌。一ツ輿に乘られ。御館に深く葬り遣はされなば。彈正も有難く候との言上なりと。地聞よりはつと驚く糸萩。大將横手をはたと打。詞サテ〳〵彈正は文武二道を兼し計か。戀の道にも大軍帥。一ツ輿とは愚の事。地お手に手を取比翼の契り。命とりめと餘念なく。フシ立寄給へば。地飛退て。詞必聊爾遊ばすな。最前夫が詞には。當時執權の飯田多門。其躰を輕々敷御手討有る時は。御譜代の者迄も。君を疎んじ參らせん。さすれば大事爰に有。女なれ共。其方左近が替りに立ば。地通御代の御爲ぞや。詞潔ふ命を捨よと有し故。地誠と思ひあられもない。男姿に形ふりを。省せし鏡の手前さへ。面目ない恥しい。抽い此身に御執心。詞君も恨し夫は猶。地聞へぬわいの胴欲な。思へば思ひ廻す程。詞生てはどうもお爲にならぬ。サア討給へ。殺してと。地忠と貞との二筋を。只一筋に思ひ込。心の内ぞフシいぢらしき。詞ソレその堅いが猶命。譬いやでも此上は。どうしてなりと抱て寢る。君よ地〳〵と付廻され。今更悔む身の纒目。あせり歎くを引しめ抱しめ。詞コリヤ女子共取持て〳〵。地アイ〳〵今から奥樣は。我君樣へ殿斗付の。御進上々御新造。サア〳〵お寢間へ〳〵と。惣々かゝり無理やりに押やり突やり跡立切。詞あれからあなたは新枕。是からこちらは手枕で。地夢なと見やうと打笑ひ。フシ明る内より小姓共。銘々捧る白臺に。卷絹黃金積重ね。フシ所せ

き迄並べ置。詞イヤ何女中方。今夕の働きの段。殿彈正様御満足に思召。御褒美として此品々。其上御盃迄下さるゝ間。頂戴有と指寄れば。地コハ有難やと土器を。戴き〳〵段々に。廻る毒酒は臓腑に渡り。忽悩亂七轉八倒。はたり〳〵とフシはかなき最期。地とつくと見屆け彈正は。刀引さげゆるぎ出。詞ハテ思ひの外能きいた。今宵の手談知たる奴原。一人も生置ぬ。不便なれどわれ達も。覺悟して夫へ直れ。ハア畏まり候と。地わろびれもせず居並んで。詞ケ様の役目仰付らるゝより。斯有んとは覺悟の命。サア右門殿關彌殿。ヲヽ縫殿後れはせぬと地後れの髪。かき上る間も。あら氣の彈正。横手なぐりに三人が。首フシ一刀に討落し。詞サア忍びおる曲者め。是へ出て水もてと。地緣先に歩み出すつくとフシ立樹の。地茂みより。おづ〳〵出る妙千枝。心を冷す水手桶提て。氣配り目配りに。洩ぬ柄杓に引匕ひずつと。差出しフシかけ流す。地彈正穢をとつくとすゝぎ。詞ハテ拔不敵の女め。儕が忍びおる事。とつく我胸に徹したり。最前よりの有增を。サ見いても殺す。見ても助ぬ。覺悟ひろげと地打出す手裏劍。はつしと請たる手桶の早足。詞ホヲ遁々。新參の妙千枝とは。飯田の妻女縫殿御前。ナント違ひは有るまいがと。地見透す詞につゝと寄。詞御推量の上は包むに及ばぬ。かく身をやつし入込しは。心得がたき此方の所存。ヲヽ探らん爲で有ふがな。今飯田金澤の兩家は。我君の兩の翅。互に疑念を挾む時は國家の惱み。サ其疑心のとけさす一ツの咄。子息の一命助け歸さん。ヤア何と。お手討と有躬左近を。こなたが助け下されんとな。いかにも。あつたら數勇士の血脉。絶ん事の殘念さ。詞を盡し申なだめ。命を助け置たるぞ。地先對面を致されよと。ずんど立寄こなたの障子。内よりさつと押開きにつこと笑ひ立たる左近。詞ヤアそなたはそこに居やつたか。もう逢れぬかと思ひしに。地無事な我子の顏見るも。彈正様のお影ぞやとフシ嬉し涙ぞ道理なり。地母の方へは目もやらず。彈正が前にくつと詰かけ。詞ヤア金澤殿御手討と有某を。助け歸すこなたの心は恩義を見せて父多門を。味方に付ん計略でござらふがの。我子のほだしに繋がれて。非道に組する多門の頭と。思ひ召るゝ愚々。淺き工みに深々と。かゝらぬ覺悟見られよと。

地雨肌ぐはらり　フシ血は瀧津瀨。詞ヤア腹切たか悲しやと。地かけ上り轉まろび。抱拘へて正體も。涙に血汐色はせて薄き一世と歎き伏。手負は態と聲はげまし。詞ヤレ母様。出かしたとはお譽なく。お歎有るは御未練なと。地恥しめられてわつと泣。詞ヤレ健氣や立派やと。地譽るは武士の表ぞよ。いか成猛き武士でも。子を先立て悅ばふか。まして女子の心じや物。なんと諦められふぞやい。斯言ふはかない事ならば。因果の此身分まひ物。育る間なき初花を。無常の風に散すとは。惜や可愛とくどき立。あやめ涙に織殿は。フシはたと倒れて取亂す。地彈正むンずと居直つて。詞頻伽は蠶より啼聲諸鳥に勝るゝと。遒惜き若者よ。餘り健氣り最期にめで。我が本名を言て聞さん。冥途の土產に承はれ。さしも强敵の尊氏に。沫吹せたる名譽の大將。新田左中將義貞公の御内に置て。鬼神と呼れたる。篠塚伊賀頭とは我事だはやい地思ひ出すも殘念や。詞主君の最期は。建武四年七月二日。わけて其日の御出立のはなやかさ。地紫裾濃の直垂に。梅檀の板冠の板。詞金銀に中黑の。印を打て金ざね。大楯上の脚當。金作りの太刀を帶。馬は名に合水練栗毛。地引寄てゆらりと召黑丸綱手へ打せ給へば。味方は勇む鯨波。敵に轟く攻鼓。峯の颿。磯打波。どつと打寄まくり切。詞大敵を見て勇む事。荒鷹が雉子を見て。鳥屋をくゞるに異ならず。地雨や霰と飛來る矢先。上る矢にはかいくゞり下る矢には乘すかし。向ふてくる矢は小太刀を以て。切ては落し請ては拂ひ。はらり〳〵と切拂ひ。須彌の四方の四天王魔けい修羅が放つ矢を一度に切て大海に拂ひ落すがごとくにて面を向る敵もなし。ホヽホヽ、我ながら弓取かなと。鞍笠につゝ立給ふ。折から飛くる白羽の矢に。甲の直中はつしと射られ。急所の痛手にたまり得ず馬よりどふと直倒。土に骸も運命も埋れ給ひし口惜やと。無念の涙はら〳〵〳〵。握り詰たる掌に。萬斤の碇をも。摑挫んフシ分怒の形相。地扨はと苦しさ打忘れ。這寄手負をぐつと睨付。詞何と聞たか小悴め。斯恨有る尊氏めは。早くたばつて今の義詮。きやつは我手に入し小雀。今の間に握り殺し。足利の根を斷て。再び新田の家を發さん。儕も足利譜代のやつ。軍の手始め血祭ぞと。地ひらりと見へし刀の下。はかなく落し我子の首。わつ

と計に フシかき抱き。絕入消入歎きしが。地氣を取直しむつくと起。隱せし小筒の覘ひは空中。とふど打たる炎の丸かせ。末は亂れて偏弃と。たなびき渡る狼烟の簇。忽聞ゆる陣太鼓。詞篠塚にたりと打笑て。ハテしほらしくも計りしな。地さも有いかにと奥の方。見やる先よりかけ來る軍藏。詞扨も只今飯田多門。三千餘りの手勢を引具し一度にどつと亂れ入。射立切立義詮が四方をかこみ。奥方御一子擒と致し候と。地聞よりくはつと怒をなし。いで儕原かたはしより。引裂捨んと小踊し。フシ奥を目がけて飛で行。地軍藏たけつてヤア〳〵者共。詞早く來つて女めを。討取れやつと下知より早く。地庭へひらりと織殿御前。空しき首の髻髪。口に咥て拔刀振かざしてぞ フシ身構へたり。地前後左右より一時に。突出す鏑に身を沈み。詞上を拂へば下段に構へ。突くる片鎌切落し。ひらり飛退つま先を。目がけひらめく鋼叉。地蹴上る裳ひら〳〵〳〵。紅草の脛あらは亂るゝしどろの鎖先をはらり〳〵と切散せば。恐れて フシとつと逃込だり。地コリヤたまらぬと軍藏も。驅出す跡より織殿は。透さず素鎖投突の。穗先鳩尾に拔通。ぎやつと計に倒るゝを。見捨てこそは 三重へ遁れ行。地幾重か深き奥の間へ阿修羅のごとくかけ込篠塚。向ふを支る力者共。取たとかゝるを引掴み。右へ打付左へはたり投倒せば。前後一同にむずと組。腕骨ぽつきりむりゝと云し。張退打退人礫。群集來るを蹴上る水月。蹴飛すきよく月。卽死の死骸を飛こへ刎越。隔の障子蹴放せば。内にすつくと多門の頭。八ツ若小脇に引だかへさも寛然たる フシ其出立。詞ヤア比興成多門が行跡。躬を擒に篠塚を召捕んとは奇怪なりと言せも立ず。イヤ比興とは汝が事。女を餌に取入て。君を盪す所存の底。探ん爲に間者を入。奪ひ取せし守にて族性とくと知たる篠塚。我君を討んとねらふも。義貞が仇を報はん忠義なれば。あながち非道の叛逆に有ず。去に寄て。義詮公も助たく思せ共。假にも謀叛の統領たる者助ては政道立ず。潔く切腹せば。汝が遺領此躬へ。其儘下し置れんとの御墨付と。地差上見すれど見向もせず。くつ〳〵と吹出し。詞ヤア儕等が心にくらべ。身の爲の謀叛と思ふか。主君の敵足利を討亡し。新田の家を起さんと。幾許の千辛萬苦も。時至らざる殘念〳〵。地迚も開けぬ

運命ならば。助る迚助からふか。躬迚も此世に殘し。敵の祿をおめ〳〵と。打喰はせてよい物か。詞後の榮花を思はぬ性根。よく見て置けと拔討に。地はつしと切たる我子の首。かへす刀を我腹へ。ぐつと突立どつかと座し。詞サア伊賀頭が相果れば。最早天が下に恐しい者はないぞよ。義詮始め儕等も。枕を高ふ上股打。命長いを悦べと。地あく迄雜言軍兵共いで首取んとかけ寄を。多門の頭制しとゞめ。詞天の守護する足利を。ねらひ討んとせし天罰。思ひ知せん爲なれば此儘捨置苦痛をさせよ。いざや還御の御供と。地見捨て出る大勇の。下知に從ふ諸軍勢。勝鬨つくり勇をなし。フシ皆々引取出て行。地篠塚むつくと起直り。一重の肌衣腹卷に。しつかと引しめ呼子の笛。吹夜嵐にざはざはと。草打合を壺井戸より。追々上る武者出立。詞兼々仰置れしごとく。隨分切拔跡をくらまし。地中に忍び候所幽に聞へし御相圖に。殘らずかけ付候と。地皆庭上に フシ居並んだり。詞ホ、、、、いしくも出かした。我が最期を見屆けず。討捨引取る多門の頭。深き計略有つらん。中々心赦されずと。地歩み寄たる勸請の。宮の扉をこぢ放せば。内より出る月の顏眉もけ高き公達の。御手を取てコリヤ〳〵汝等。詞是こそ新田義治公の御公達。やがて御運を開かせ給はん。梅が谷迄御供せよ早く〳〵。地我は是より義詮が歸るを迫かけ恨の矢先。肝のたばねを射てくれんと。弓手にかい込重籐の。弓に白羽の鏑矢も。只一筋の扇が谷。心の的と逸散に。飛がごとくに 三重急ぎ行。還御の粧ひ傍を拂ひ。前後を守護する騎馬武者歩武者。きらめく笠陣松明。振立押立フシ打て通る。地一群松のしげみより覘ひすまして篠塚が。放す矢先は乘物の。物見にすつぱと立騷ぎ備へ崩れて諸軍勢。ソレ曲者を遁すなと。フシ四方八面狩立る。地篠塚是にとずつと出。縱往無盡に手を碎き切捨〳〵追まくれば。地むら〳〵ばつと迯散たり。いで義詮が首取んと。乘物蹴放し仰天し。詞ヤア南無三寶。コリヤ女房。扨は多門が計略の。網に入しか。ヱヽ口惜やと。地齒がみをなしてかけ出すを。暫し〳〵と多門の頭。備を立て フシ立向へば。詞ヤア御公達迄奪はれたか。よし〳〵篠塚が死物狂ひ。地覺悟ひろげと飛かゝるを。隔たる多勢多門の頭。詞最前見遁し置たるも。此公達を見出さん爲。其方

が家來の者共守護し立退途中にて。一々討捨奪取しぞ。今こそ新田の名跡を。此公達にて取立させん。無念を晴よと。地仁心の。詞にがつくり怒もゆるむ。腹帶むずと引ちぎり。詞ヲ、禮も言ぬ。恩にもきぬ。武の冥加を思ふならば。隨分惡敷計らふな。我が存念も。是迄なりと。地首さし延れば多門の頭。南無と一聲一刀。打かためたる君が代は。不朽大成幾萬歲。榮へ行こそ樂しけれ。

安永貳癸巳歲七月二十八日

作者　近松半二
　　近松金三
　　近松東南

時代蒔繪世話摸樣　いろは藏三組盃　終